ＩＳ～インフィニット・ストラトス～赤竜と白の騎士

kuxu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～赤竜と白の騎士

【Ｎコード】
Ｎ１０２８Ｘ

【作者名】
ｋｕｘｕ

【あらすじ】
原作主人公、織斑一夏は専用機をもち、その信頼は誰にでももてるほどのカリスマ性の高い少年である。
対して、オリジナル主人公の相田翔は、専用機なしの謎の転校生である。
２人の主人公が同じ場所、時間をともに行く中、それぞれの物語が始まる。

オリジナルキャラ、ストーリが盛りだくさんに書くつもりです。
どうか一回読んでください。

１―１　プロローグ（前書き）

始めまして。
ｋｕｘｕと申します。
今回初の二次創作作品となります。
暖かく見守ってくれるとうれしいです。

１―１　プロローグ

これは、中学のころの記憶なのか。確か、僕はＩＳ学園に来ていたはずなのですが。

僕は何も知らない道で手間取っていた。この時、僕は先生の手違いのせいでＩＳ学園に来させられていた。僕もＩＳは女性しか使えないことは知っている。だが、その一緒にきた女子たちが自分勝手な行動のせいで僕一人だけ取り残されてしまった。そのとき、僕はある開いているドアを見つけてあけた。

そこには確かにＩＳがあった。僕はその時何がしたかったのか、そのＩＳに触った。触ってしまった。

触ったＩＳ瞬間、いきなり輝きだした。まるで僕に何かを伝えようとして。

（な、なんですか。このＩＳは一体僕に何を！？）

僕は手間取ってそこから動けなくなった。まるで眼が熱くなるように感じた。

「こら！！君は一体何をしている！！」

その時、大きな声が僕を呼んだ。それからの僕の記憶は無い。聞こえた声はただ一つ、「また男か」っということだけだった。

その後、何をされたのかは僕は知らないが、なぜがその時から僕は転校することになった。

この時から僕の運命が変わった。

※

ＩＳ。正式名称は【インフェニット・ストラトス】。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、篠ノ之束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていった。

今は宇宙進出は止まっており、今はスポーツとなって注目されている。

ただ、このＩＳは女しか使えない。だが、日本にある、アラスカ条約に基づいて日本に設置された、ＩＳ操縦者育成用の特殊国立高等学校、ＩＳ学園の校門の前にある男が一人いた。

※

ＩＳ学園の学生寮の食堂でここにももう一人の男がいた。男の名前は織斑一夏（おりむらいちか）が朝ごはんを食べていた。

もちろん食べているのは一人ではない。一夏がいる席の周りにも５人の女子がいる。だが、ただいま何かしら討論中である。

「お前。なぜ邪魔をする！！」

長い黒髪でポニーテールの髪型をしている少女、條ノ之箒（しののほうき）が声を荒げながら言った。

「あなたこそ、この件はわたくしに任せておけばいいのですわ」

縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼を持つ少女、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットは席に座りながらも優雅に言い放っていた。

「セシリア。それはこっちのせりふよ。あんたたちはおとなしくしとけばいいのよ」

ツインテールの髪に小柄な体格という可愛らしい見た目の少女の凰（ファン）・鈴音（リンイン）だが、結構サバサバした性格の少女である。愛称は鈴。中国の代表候補生でもある。

「ぼ、僕も話に入れてほしいな」

中性的な顔立ちで、金髪を首の後ろで束ねており、スマートな体型をしている少女、シャルロット・デュノアはあせりながらみんなの話の話題についていっている。フランスの代表候補生。一夏はシャルと呼んでいる。

「お前たちに私の嫁は渡さない！！」

長い銀髪で左目の方には黒い眼帯をしている少女、ラウラ・ボーデヴィッヒは食事だというのに腕組をしながら言った。彼女はドイツの代表候補生である。

「お前ら、さっきから何の話をしているんだ？」

一夏はさっきから彼女たちがなんの話をしているのかまったくわ

かっていなかった。だが、この質問をしても「そっちには関係ない」と言われてしまう。

一夏はただ首を傾げるしかなかった。だが、一夏はまったくわかっていなかったが、実は二週間後に行われるダッグマッチ戦のダレが一夏とタッグを組むか言い争いをしていたのだ。

一夏はタッグマッチ戦のことは知っていたが、この言い争いの意味はわかっていなかった。この5人の言い争いはＨＲが始まるまで続いたそうな。ちなみに鈴はクラスが違うので担任に頭をたたかれた。

※

1年1組。これが一夏たちのクラスである。鈴はちなみに2組である。

「はい。では皆さん話を聞いてください」

1組の山田真耶(やまだまや)が一番前の黒板の前に立った。ちなみに前の隅にはこのクラスの担任であり、一夏の実の姉である織斑千冬(おりむらちふゆ)が腕組をしながら立っている。

「え～実はこのクラスに転校生が着ました」

『え～！！』

クラスに大きな声が舞い上がる。

このクラスにいるシャルとラウラは元は転校生なのだ。こんなに

このクラスに転校生が集まのか。さらにはこの学園の転入や転校生は珍しいものなのだ。

「で、では入ってきてください」

麻耶に言われて、クラスの前のドアから一人の生徒が入ってきた。しかし、少しおかしいところがある。それはその転校生が男子だからだ。

身長は１７０あるか無いかの大きさで、髪は赤色で左前髪は少し分かれており、頭上の髪は少しもボサボサしていなく、彼の真面目さが伝わってくる。さらには誰もかがわかるほどの赤眼なのだ。

「で、ではご挨拶を」

麻耶に言われて少年はうなずいた。

「相田翔（あいだしょう）といいます。これからよろしくお願いします」

翔は軽くお辞儀をしてきた。

そのとき、いきなり女子たちが騒ぎ始めた。まあ、一夏以外全員女子なわけだが。

「また男子よ。男子！！」

「次は赤髪の日本男子！！」

「顔かわいい。女の子みたい！！」

女子たちそんなのこと一斉に言ってきた。

「おい！！お前ら静かにしろ！！」

その刹那。さっきまで隅っこで腕組をしながら立っていた千冬が一喝を入れてきた。
その言葉とともに一斉に女子たちは騒ぐのをやめた。

「相田。お前は後ろの席だ。前と同じ、男子の世話は織斑。お前がしろ」
「はい」
「だ、だが千冬姉」

何かを伝えようとして立った一夏だが、いきなり出席簿で頭を叩かれた。

「織斑先生と言えと何回言ったらわかる！！」
「は、はい。織斑先生」

一夏は頭を抱えながら誤った。「わかればいい」といって千冬は腰に手を当てた。翔はその光景を表情変えずにみている。

「相田はちゃんとした検査の結果、ちゃんとした男子だ」
「そ、そうですか」

以前シャルの男装件があったのでＩＳ学園ではちゃんとした性別の検査をすることになった。

翔はさっきまでのやり取りを無言で見ていた。

１―１　プロローグ（後書き）

今回、誰もかが考えているだろうと思われるダブル主人公としてこの物語を始めました。
どちらの主人公も応援してくれるとうれしいです。
感想、お待ちしています。

では、以上ｋｕｘｕでした。

1―2　操作

翔は千冬に言われて一番後ろの席に座った。席に着くまで何人かの生徒の眼が光っていたのはわかったが、気にしないことにした。

「それでは、生徒も増えたことですし、早速授業を始めましょう」

麻耶が気を取り直して授業を始めた。はじめは普通の授業だったのだが、数分してから問題は起こった。

（まったくわかりません）

翔は心の中でそうつぶやいた。もうすでに汗が出てきている感覚がする。

実は翔の転校は急な話なのだ。そんな翔にものすごく分厚い本を読めるはずがない。
実際、決まったのは3日前のことだ。

「はあ」

翔はため息をついた。だが、そのため息は見られてはいけない人に見られてしまった。

「どうかしたのですか？相田君」

麻耶が心配そうに、だが眼の奥はものすごく輝きながら聞いてきた。

「え？い、いや。その～」

麻耶が声をかけた瞬間、クラスの全ての生徒が翔のほうを振り向いてしまった。さらに翔の汗がさらに流れていく。

「そ、その～ほとんど内容がわからないのですが」

翔は何かを決心して麻耶に伝えた。

麻耶と周りの生徒はまた驚いていた。

「あの～転校前に渡された冊子が会ったはずですが」

「読み終われませんでした」

翔は実は読み終わるどころかまったく読んでいなかった。ほかの引越しや、この学園にいくための手続き。そのおかげでまる3日間が終わってしまった。

「相田の場合はしょうがない。だが相田」

「は、はい」

「次の授業は実際にＩＳを動かすものだが」

「……」

千冬の言葉に翔は無言になってうなずいた。ちなみにこの会話のとき、周りの生徒はヒソヒソと話をしていた。内容はなんかわかる気がする。

※

そしてこの時間は翔にとってなにもわからないまま授業が終わった。落ち込んでいるとき、一夏が翔の席に来て話しかけてきた。

「おい。男子は急いで着替えに行かないと」
「え、あ、はい」
一夏に言われて翔は立ち上がった。
そして急いで教室を出た。

「とりあえず、自己紹介だけな。俺は織斑一夏だ。一夏でいい」
「相田翔です。こちらこそ。翔でいいです」
お互い自己紹介をして着替えるために第3アリーナに向かって走る。どうやら翔は校内の道は覚えているらしい。
そして第3アリーナについた2人は早速ISスーツに着替え始めた。翔の着替えを見て一夏は話しかけた。
「お前、意外と細いな。なんか、その、ちゃんと食べているか？」
「え？ええ。食べていますが、僕はどうやら筋肉が付きにくい体質らしいので」
「そうなのか」
一夏は翔の体を見た。確かに細い代わりにまるで筋肉がほとんど無いように見える。
しかも肌は見ただけで女性見たいに見える。
「お前、本当に男だよな」
「はい。そうですが」
一夏の問いに翔はなにかわからない顔で即答した。

「そ、そうか」
「それよりも、早く着替えなくっていいのですか？」
そんな会話をしている間に翔はもうすでに着替えを済ませている。翔のＩＳスーツは赤と黒が混ざっている色で二の腕まで袖が伸びていて腹の部分は完全に隠れている。
「あ、マジかよ！！」
翔の言葉に一夏は驚いた。急いで着替えを再開した。急がないとあの地獄のお説教がまっている。

※

翔が声をかけるタイミングがよかったのかギリギリ時間は間に合った。だが結局一夏は千冬の出席簿アタックを食らった。理由は遅いの一言だった。
「では、皆さん。今日もＩＳの空中コントロールの実習です」
『はい！！』
みんな元気良く返事をした。だが、翔だけテンションが低かった。
「では、それぞれ専用機持ちを中心にしてそれぞれ操作しろ」
千冬の言葉の後、みんな言われたとおりに集まった。翔は一夏の元に来た。
「では、まずは順番ずつ操作しようか」

一夏の言葉にみんなうなずいた。こうして次々にＩＳの操作をした。

「どうだ一夏。調子は」

そのとき、一夏の幼馴染でもり、専用機持ちでもある箒が話しかけてきた。

「おう箒。まあまあだな」

「そうか」

「じゃあ次は翔だな」

こんなタイミングに箒が来たのはそれは翔の観察である。実は専用機持ちの５人は実は翔が女であるかも知れないとの疑いがあるのだ。

こうしていま箒が監視としてこっちに来たのだ。もちろん、自分がやるべきことは忘れてはいない。

「じゃあ、乗ってくれ」

一夏が言われて翔はＩＳに乗った。翔が乗っているのは日本の専用機の打鉄だ。

だが、乗ったのはいいがまったくＩＳはビクともしない。

「おい、どうした？」

一夏が心配して声をかけた。

「あの～。どうやって空中に浮かすのですか？」

翔は静かに聞いてきたがさすがに今の言葉に全員こけてしまった。だが翔は真顔で聞いてくる。

「お前、ちゃんと動かしたことはあるのか？」

「じ、地面を歩いたことがあるだけですが」

翔はあせって告げた。どうやら翔はＩＳの動かし方をまったく知らないようだ。それどころか全くＩＳの知識が無さそうだ。

「イメージするんだ。空中に浮くみたいなイメージを」

「イメージですか」

翔はそういわれて目を閉じた。そのとき、打鉄がいきなり浮き出した。

「うわ！！」

この時、初めて翔の表情が変わった。だが、動いたのはいいがコントロールがうまくできていないようだ。しばらく空中にいると落ち着いたみたいだ。

「よかったです」

翔は安心の息を吐いた。そして空の景色をゆっくり眺めた。

「これが、空から見た景色ですか」

なんなだ心地よい気持ちがした翔だった。

１―３　秘密の女会議

翔はいったん地面に戻ってＩＳから降りた。だが、戻ったとき、みんな驚いた顔をしていた。

「あれ？どうかしたのですか？」

翔は麻耶に聞いた。

「あ、あの相田君。今のは？」

「な、なんですか？」

いきなり強く迫ってきて逆に翔が驚いてしまった。

「すごいですよ。打鉄であんなスピードを出すなんて」

麻耶は目を輝かせながら言った。だが、翔はまったく意味わかっていなかった。そして、翔は麻耶の輝いた眼を回避した後、千冬に話を聞いた。

「あの～僕はいったい？」

「相田はどうやら自覚はしていないようだな。実はさっきの打鉄の飛行スピードがいままでに無い最高スピードだったのだ」

「さ、最高スピード」

出した本人も話を聞いてさらに驚いた。

これでみんなが驚いた理由もわかった。

「すごいな翔」

一夏が微笑みながら翔に言ってきた。

「これぐらいの速さが出せるなら専用機はどうなるんだ？」

「相田に専用機など無い」

一夏の言葉に千冬が訂正した。その言葉にさらに全員驚いていた。

「お、俺みたいに翔も専用機もらうんじゃないのか？」

そのとき、また一夏に出席簿アタックが炸裂した。

「敬語を使え。しかも、相田が専用機がないのは織斑。お前のせいだと言ってもいいのだぞ」

「お、俺のせい」

「更織（さらしき）と同じ理由だ」

一夏はそのことを思い出した。以前、更織簪（さらしきかんざし）の例があった。彼女は日本の代表候補生である。だが、一夏の専用機、【白式（びゃくしき）】の開発で日本の開発者のほとんどがそっちに力を入れてしまって変わりに簪の専用機の開発ができなくなったのだ。翔の専用機も同じ、いや、それ以上のことなのだ。

その理由は翔の本人にある。翔のＩＳの適正はＣである。しかも、今の行動。とても専用機を扱える素質ではない。

一夏の場合は千冬の以前の専用機、【白騎士】のコアがあったが、今回は翔に使うコアもないのだ。

「そういうことだ。とても相田の専用機を用意できる状態ではな

いのだ」
「はあ」
翔はなにもへこんではいない様子で返事をした。まるでそのことをあらかじめ知っていたみたいに。

※

この日の授業はすべて終わり、翔は一夏と同じ部屋にいた。２人ともすでに私服に着替えている。もう夕飯は食べ終わっている。２人は静かにお茶をすすった。
「お、翔。お前お茶入れるの上手だな」
「ありがとうございます」
一夏に言われて翔はお礼を言った。だが、一夏はひとつ思ったことはあった。あれから翔とはいろんなところを案内してたくさんお礼を言われた。だが、翔は決して笑顔を向けなかった。
（なんか、今回の転校生も結構癖があるやつかもな）

※

同じ時間、箒、セリシア、鈴、シャルロット、ラウラたちはみなシャルロットとラウラの部屋に集まっていた。この集まりは、翔のことに関係している。
「で、どうだった？」
「なぜになにもしていないあなたが仕切るのですか？」
「私は違うクラスだからしょうがないでしょ」

「まあまあ2人とも」

ただの会話のはずだったのに口喧嘩に発展しそうになりかけたとき、シャルロットが止めに入った。

「しかし、実習の時もそうだったが別に怪しいところは少なかったぞ」

箒が本題を話すために口を開いた。隣でラウラもうなずく。

「しかし、顔は女みたいだったよね」

「だが、一夏に聞いたところ、着替えは一緒に着替えていたらしいぞ。普通に会話もできているらしい」

ラウラが思い出しながら言った。だが、鈴はその言葉に少し疑問に思った。

「あんた。よく聞けたわね」

「うん？なんか悪いのか」

「一夏さんの性格が違ったら感気づかれていたかもいませんでしたのに」

ラウラの行動にセルシアはため息を吐きながらつぶやいた。

「だけど、本当に僕みたいに女の子なのかな？」

シャルロットが改めて言った。そう。この作戦会議は翔は実はまた女性ではないかのことだった。シャルロットの件のことでこの4人はさらに怪しんでいる。

「あんたが言うと説得力がないわね。完全に男子になりきっていたくせに」
「そ、そんなぁ～」
鈴の一言でシャルロットはシュンとする。だが、４人は気にしないで会話を続ける。
「とにかく、わが嫁をまもるために何とか事件が起こる前に何とかしないとな」
「あんたの嫁じゃないけどね。それには同感だわ」
ラウラの言葉に少し不服だが鈴は同感したみたいだ。
「私もこれ以上は被害を出したくないですわ」
「ほう。その言葉にはいろんな意味が含まれいるみたいに見えるぞ」
セルシアの言葉に箒がにらみながら言う。
「僕は、いったいどうしたらいいのだろ」
一人、シャルロットだけ違うことを気にしていた。男であってほしいのか、女であってほしいのかわからなかった。
「とにかく、一番高率な方法を考えるしかないな」
「しかし、着替えが一緒にできている状況でさらに性別が確かめられる方法はあるのか？」
箒にそういわれてみんなうで組しながら考え始めた。
だが、もうすでに答えは出ていたはずだがその方法は一切使いた

くなかった。

「やはり、お風呂ですかね」

セルシアが意を決して口を開いた。みんなその言葉に耳を傾ける。

「少々危険ですがそれしかないですよ」

「「「「危険」」」」

みんなセルシアの危険という言葉のみに反応した。それはみんなが口にしたくなかったことと一致している。それはもし翔が女だった場合だ。

「どどど、どうしよう」

頭が沸騰しそうなシャルロットが枕を抱きながら言った。

いったい何を想像したのか。

「だが、これが一番効率がいいだろう」

「そうだな、もし一夏が手を出したとき」

「私たちで殺せばいいのだから」

全員いっせいに顔が暗くなった。だが、いまだにシャルロットのみが顔を赤くしていた。

１―４　朝と学習

次の日。

翔と一夏は朝食をとるために食堂に来ている。とりあえず2人は焼き魚の定食を頼んだ。2人が朝食を食べているとき、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラが近くの席に来た。

「お、おはよう」

「……おはようございます」

一夏が挨拶した後、翔も静かに挨拶をした。その声はまるで昨日の同一人物は思えない。転向してきたときと同じテンションだ。

「うむ。おはよう」

「おはようございます。一夏さん。相田さん」

「朝から仲がいいようね」

それぞれ朝食を持ちながら席に着いた。

「なんだよ鈴。仲がよくって悪いのか？」

「べ、別にそんなんじゃ」

「ゆっくり眠れた？一夏？」

鈴がしゃべっているとき、シャルロットが会話に入ってきた。もちろん、鈴は不愉快な顔をしている。

「一夏。朝食の時は私を誘えといっているだろ」

ラウラが腕組しながら言ってくる。

「そういわれても、翔のことがあるからな」

「こいつはまだほかの生徒と話していないじゃないか？」

ラウラは翔を見ながらいう。鋭いラウラの目線を浴びても、翔はおくすることなく朝食を食べ続ける。何回かこちらを見たがまだ食べ続ける。それは何も思っていないかのように。

「こいつ。いい度胸してはいるな」

「なんで喧嘩腰なんだよ」

一夏があきれながらツッコム。

「しかし、ほかの生徒とは本当に話さないな。何でだ？」

「その、まだこの学園にきて手間取っているみたいな感じで」

一夏が聞いたら翔はそう答える。

「そうなのか」

「一夏はそんなことはなかったな。普通に女子と話していたぞ」

箒はいやみを言うようにいう。

「なんでそんなにいやな風に言うんだよ。しかも普通じゃねえよ。緊張していたよ」

一夏は訂正しながら言う。だが、箒の言葉を聴いてほかの４人は一夏をにらんだ。

「だから違うって」

にらんでくる4人プラス1に対してさらに訂正する。

「一夏。僕もう食べ終わりましたけど」

「え！？マジで！？」

さっきからこの6人が会話をしているとき翔はパクパク朝食を食べていた。もちろん一夏は食事はほとんど進んでいない。そんな翔を見て一夏は一気に食事を流し込む。

「いや、そんなに急がなくても大丈夫ですよ。僕はお茶でも飲んでいますし」

「お、おお。そうか。！！」

そんな時、一夏が一気に顔が真っ青になった。これはもしかしなくってものどに魚の骨が刺さったらしい。

「あ、一夏。お茶です」

「す、すまねえ」

一夏は翔に差し出されたお茶をのんだ。

「ハア。ありがとな翔」

「いいえ。ビックリしました。さっきも言いましたが食事はゆっくりとってください」

「お、おお」

翔にそう言われて一夏は改めて食事を食べる。その光景を見ていた5人はお互い見合った。完全に目で会話していた。

※

今日の時間は普通授業の時間だ。翔は日本人ということなので普通に日本のクラスで勉強していた。今は数学の時間だ。

「では、この問題を相田。解いてみろ」

「は、はい」

千冬に言われて相田は席を立つ。問題は結構難しいものである。みんな頭を抱えている。

「――です」

だが、その問題をすぐに翔は解いてしまった。周りのみんなは驚いていた。

「……。では相田。これも解いてみろ」

千冬はそういいながら即興に問題を作った。だが、その問題も表情一つ変えずにあっさり答えた。

その後、普通に授業は終わった。

「すごいね。相田君。あの問題結構難しかったのに」

「あ、ありがとうございます」

「お前、頭いいんだな」

女子生徒の言葉を返した後、一夏が翔の席に来て言ってきた。

「じゃあ、これも解いてみてよ」

翔の席に布仏本音（のほとけほんね）が言ってきた。一夏はのほほんさんと呼んでいるらしい。

「６１６１８２６１９７×７５４４１５７１４５は？」

「４６４８５７８５１３０３４５７２７５６５です」

……。

一瞬。一瞬だった。翔の口からはなぞの呪文みたいな数字を言ってきた。

「え、え～と」

「お前、答えわかっていないだろ」

「そ、そんなことないよ。じゃあ次は７８７７８×９４５８５は？」

再び本音は問題を出してきた。しかも結構難易度を下げてきた。

「７４５１２１７１３２です」

「あ、そうだよ！！」

「違います。正確には７４５１２１７１３０です」

「へ？」

「やっぱおまえ答えわかっていなかっただろ」

本音の反応に一夏がツッコム。翔は軽くため息は吐いた。

「も～。アイッチの意地悪」

「なんですかその呼び方は？」

本音にそう呼ばれて翔は聞く。本音はそれを聞かれて得意げな顔になる。

「ん？相田君に私がつけたあだ名だよ」

「被害者がまた一人か」

「被害者ってどういうこと？おりむ～」

本音は一夏の腕に突っつく。まるで子供だ。

「そういえば、相田君はタッグマッチのとき、誰とペア組むの？」

そのとき、鷹月静寐（たかつきしずね）が翔の席に来て聞いてきた。

「そういえば、僕はいまだにＩＳの操縦があやふやなんですが」

翔もそのことをわかっていない。タッグマッチのことはもう知らされているので知っている。

ちなみに、教室のドアの小さな隙間から5人の少女たちがその光景を見ていた。てか、箒は別に隠れていなくてもいいと思うのだが。

１―４　朝と学習（後書き）

後書き暴露コーナー。

翔「な、なんですか？このコーナーは？」

作者「後書きのコーナです。僕とこの小説のキャラと一緒にこの小説の話をするコーナです」

翔「と、言うことは暴露もありということですか？」

作者「ええ。ほかの小説がぎりぎりなのにこの小説をあげているとかですよ」

翔「すでに暴露しましたね」

２人「……」

２人（ボケがいないと話が進まない！！）

早くもダンマリですみません。

1―5　疑問と風呂場の少女たちの作戦

昼休み。

みんな集まって昼食を食べていた。翔はお昼に似合っているパンで一夏はラーメンを食べている。だが、なかなか2人の食事は進まなかった。理由は簡単だ。隣の机の例の女子5人にものすごく見られているからだ。

（お、俺。なんか怒らせることしたか？）

（な、なんでこちらを睨んでいるのでしょうか）

そんなこと考えていたせいで食事が終わるのに時間がギリギリになってしまった。教室に戻るときもわかりやすい尾行でついてきている。

「あのな～お前らさっきからなんだんだ？」

我慢ができなくなった一夏は後ろを向いて聞く。後ろの人影はわかりやすくビクンとなっていた。

「な、なんでもないわよ」

「そ、そうだ。なんでもない」

「そうですわ。同じクラスなんですし」

「決して尾行していたわけじゃないからね」

……。

シャルロットの一言により全員黙りだした。完全にいまのシャル

ロットの一言は尾行していましたと言っているみたいなものだ。

「あれ？ボーデヴィッヒさんは？」

翔はまるで最初からラウラも一緒に尾行していたのをわかっているように言った。

「あれ？あいつどこに言ったのよ」

本当にさっきまでラウラもそこにいたそうだ。たぶん、本気で一夏を尾行していたのだろう。見つかったときの隠れたかもさすがに知っているようだ。

「しかし、よくラウラもいたことを知っていたな。まあ、予想はできるけどな」

「まあ、それもそうですが、見えていましたから」

「見えていた」

一夏は思った。確かにさっきまで見つかった４人はちらちら見えていたが、ラウラの姿は本当に見えていなかった。それなのに、翔は一夏よりも後ろを見ていないのにラウラの姿を見えていたといっている。

「あ、そろそろ時間です。急ぎましょう」

「お、おう」

そういって全員急いで教室に向かった。

※

今日の最後の授業はＩＳの実習だ。いつもと変わらず、一人一人ＩＳに乗っていく。翔は相変わらずＩＳの操作がうまくできていない。

「相田君とＩＳの適正は結構低いですが、こんなに操る人が苦手な人はそうそういませんでしたね」

「す、すみません」

麻耶に言われて翔は少ししょんぼりする。相変わらず、翔は操るとき、早いのはいいがその分さらに操作がうまくできていないのだ。

「相田さんの場合、集中力が足りないのですか？」

そのとき、セシリアが話しかけてきた。

「それだったらこの銃を使って見せてよ」

近くにいたシャルロットがそういいながらハンドガンを渡した。翔は渡されたハンドガンを構えた。

「じゃあ、ここのターゲットに狙って見せてよ」

そういったと、翔の前にターゲットが出てきた。しかし、いま翔が乗っている機体は打鉄だ。銃を使う装備はまったくない。つまり、一夏と同じ方法でこの銃を使うしかない。

「では、いきます」

翔はそういってハンドガンの引き金を引いた。バンっと翔が持っていた銃先から大きな音が出た。

「ど、どうですか？」
「こ、これは」
翔が撃った弾は見事にターゲットの真ん中に当たっていた。
「これは集中力はあるようだね」
「そ、そのようですね」
「だったら考えられる可能性はひとつだけだ」
「あ、織斑先生」
千冬がそういいながらこっちに来た。どうやら千冬には翔がなかなかうまくＩＳが操作できない理由がわかったようだ。
「もしかしたらお前がそのＩＳの適正が合っていないようだな」
「て、適正ですか」
「それってどういうことだ？」
一夏が千冬に聞いた。千冬はうなずきながら言う。
「ＩＳのコアは本当にブラックボックスだ。それを考えればその可能性がものすごく強い。しかもＩＳが操縦できるのに今までそんなことが起こることは初めてだ。つまり、新たな可能性が生まれる」
千冬の言葉にみんな静かに聴いていた。
※
この日は特別に男子は大浴場を使うことが可能の日になった。もちろん、こうなったのは箒たちの仕業だ。ここから彼女たちの作戦

が始まる。

「しかし、千冬姉の話を聞いていると、お前がＩＳをうまく操るには時間がかかりそうだな」

「気が重いです」

２人は着替えのあと、普通に風呂場に来た。相変わらず、この風呂場は広い。

しばらくお互い体やら洗った。そのあと、同時に湯船につかる。

一夏はあの時、シャルロットと一緒に風呂に入ったときのことを思い出して赤面する。その顔をあるカメラが見届けていた。

「あんた。何したのよ」

「な、何で僕に来るの？」

その監視カメラの映像を見ている少女５人は一気にシャルロットを睨む。

「しかし、今の様子だと別に女の部分は見せていないな」

さっきから普通に見ていたが確かにおかしいところはない。てか、この５人は完全なる覗きだということには気づいていないのか。

「しかし、相田がさっきからこっちを見ているぞ」

そう。実はさっきから翔の目線がこっちのカメラを見つめていたのだ。ちなみにこのカメラは天井の隠しカメラだ。

「ん？どうした翔」
「あ、いえ。何でも」
翔はそう言ったが明らかに気にしていた。
「……」
結局、少女たちが思ったことはなにも起こらなかった。だが、代わりの事件が起きた。
「さて、そろそろ上がるか」
そう言って一夏は立ち上がったとき、カメラ映像を見ていた少女たちは顔を一気に赤くした。理由は、言うまでもなかった。

※

箒、セシリア、鈴がシャルロットとラウラの部屋から出たとき、その場に翔がいた。
「こんにちは皆さん」
翔は無表情で挨拶した。
「あんた。何よ」
「何って。そうですね」
「用が無いならわたくしたちは自分たちの部屋に戻りますわ」
そう言って3人は自分の部屋に向かってあるく。

「まあ、一夏にはあの監視カメラは気づいていなかったようですが」

その言葉に3人どころか、さっきまでドアを開けてみていたシャルロットとラウラもビクッと体が動いた。

「まあ、ほどほどにしてくださいね。あれも立派な覗きなので」

そう言って翔は自分の部屋に向かって歩いた。

「な、なんでバレた？」

「あの人。本当に只者ではありませんわね」

不思議な空気が少女たちを包みこんだ。

１―５　疑問と風呂場の少女たちの作戦（後書き）

後書き暴露コーナ

一夏「今日は俺が担当だな」

作者「とは言っても暴露ごとなんてほとんど起きませんが」

一夏「それじゃあただのトークコーナじゃねえかよ」

作者「まあ、そのことは百も承知でしたよ☆」

一夏「大丈夫なのか？この作者。来週からヒロインたちが来るのに」

作者「それって」

一夏「命が、あるといいな」

作者「！？」

１―６　一夏の用

翔が転向してから４日経った日曜日。珍しく翔は一人で校内を歩いていた。しかし、彼の行動に変わったことはない。大抵は一夏が一緒にいるので下手なことはできないのか。まだ翔を怪しんでいる箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは尾行していた。

「あんた。その格好はなに？」

ラウラに向かって鈴が問う。

「何って、外での尾行やお忍びの時はこの格好が常識だと聞いたぞ」

そうラウラはどこから出てくるかわからない言葉を自身満々に言った。だが、格好は今の場所では怪しすぎる。その格好とは完全に迷彩なのだ。上から下までまるで軍人がきるような迷彩服だ。まあ、確かにラウラは軍人だが、ドイツなのでその格好は変だ。しかも場所は校内なのでますます怪しい。

「だからやめようっていったじゃんラウラ」

「だが、意外とこの服は動きやすい」

「あんたね～」

ラウラの言葉に全員あきれる。

「いいから脱いでください。見つかりますよ」

「ここでか？」

「部屋でお願いします！！」

「うるさいぞセシリア！！」
「いや、箒の声も十分大きいよ」

こんなことを言い合っているのですぐに翔を見失ってしまった。箒たちはばらばらに探し出した。ちなみにラウラは自分の部屋に戻った。

※一夏

翔がどこかに行ったので俺は一人校内を歩いていた。そういえば今日は朝食以来箒たちを見てはいない。まあ、あいつらだって代表候補生だから忙しいのは珍しくはない。

「あ、一夏！！」

そのとき、俺はあるツインテールの少女に呼び止められた。だが、今の俺には行きたい場所がある。しかし、そのツインテールの少女は俺を逃がさないようにこっちに向かってダッシュしてきた。

「あんた。私が呼んでいるのだから止まりなさいよ」

そういって鈴は俺の背中を蹴る。

「いてーな！！なにすんだよ」
「何ってさっき言ったとおりよバカ」
「知らねえよ。俺だって行きたい場所はある」
「いいから話聞きなさい」

おう、いきなり縛りですか鈴さん。こいつは俺のセカンド幼馴染の鈴だ。髪型を見てのとおり活発すぎるほど活発だ。あと、貧（ｒ

y。

「なんか今変なこと考えていたでしょ」

「な、なんでもないぞ」

そうそう。この言葉は禁句だった。どうやら俺は思ったことは最近みんなにも伝わっているような気がする。

「いいから、少し付き合いなさいよ」

「何でそうなる」

どうやら本気で拒否権はないらしい。だが、俺はいま本気で行きたい場所がある。

「いいから。いいから」

なにがいいのかわからないが、鈴は俺の右腕にいきなり飛びついてきた。こうされると動きづらくって仕方がないのでやめてほしい。

「動きづらいと思ってないでしょうね」

大当たりの温泉旅行だ。まあ、俺はそんなのは出す気はないが。本気で当てられるとマジで怖い。

「早く行きましょ」

―バン！！

鈴が俺の腕を引きずりながら歩き出したとき、いきなり箒が現れて竹刀で俺たちを叩こうとしてきた。それを見た鈴が真剣白刃取り

でとる。てか、2人ともすげぇ～。

「なに邪魔しようとしてんのよ箒！！」

「なに、お前ならわかるだろ」

そう言って2人とも一歩後ろに下がる。なんだ、いきなりこの展開は。しかし、俺は今すぐに行きたい場所があるので巻き込まれたくはないのでさっさと離れる。

「あんたはここにいなさい！！」

「お前はここにいろ！！」

いきなりハモリながら俺を声で止めてくる2人。なんでこのときはコンビネーションがいいのか本気でわからない。

「私だって一夏に用がある」

「あんたね。あきらめなさい。もう私が予約したんだから」

俺は何かの商品ですか？てか、どっち道、予約は受け付けてはいません！！まじて早く俺を解放してくれ。

「あ、あなたたち。ここで何しているのですか？」

ここで最悪のシーンで来たらだめなやつが現れた。このせいで俺はますます解放してくれそうにもない。

理由？

勘だ。今までの出来事で、この勘だけなら働く。なんか言っているこっちもむなしい。

「あなたたち。なに探さないで遊んでいるのですか？」

そう言ってセシリアがこっちに来る。うわ～。予想ここでもう当たることがわかる。

「こいつが一夏と一緒にどこか行こうとしていたんだ。セシリアもなにか言ってやれ」

「あんたも奪い取ろうとしたでしょ」

はて、俺はいつ鈴の所有物になったのだろうか。記憶にない。しかし、そんなことでさらに会話はエスカレート。

だが、これはチャンスでもある。このまま俺はスルッとこの場から離れて目的の場所に行こう。

「あ、待て一夏！！」

「待ちなさいバカ！！」

「お待ちになってください。話はまだ終わっていませんよ」

そう言ってくる3人だが、俺は無視して逃げる。

「あ、一夏、何しているの」

おう、違う道からシャルが現れてきた。ちなみに俺がシャルと呼んでいるのは親しみやすいからだ。だが、今はそんなことは関係ない。普段落ち着いているシャルでも後方の3人を見れば同じ風になるだろう。怒ったらある意味シャルが一番怖い。

「あ、一夏。待ってよ」

な、なぜだ。なぜあの3人にも会っていないのに追いかけてくる。

「あ、一夏！！」

前方からラウラ少佐発見。て、なぜに校内で迷彩服を着る。何かの趣味なのか？

「おい、なぜに逃げる！！」

「追いかけているからだ！！」

俺がそういうとラウラは後ろを向いて4人の姿を確認する。てか、シャルはいつの間に合流している！！完全に今の俺はいのししに追いかけられている感じである。だが、俺の目的地に行けばあの5人は入ってこれない。

「ちょっと待ちなさい一夏！！」

「まて一夏！！」

「お待ちになってください」

「一夏。まってよ～」

「ふむ。意味がよくわからんぞ」

じゃあ追いかけてくるな！！俺はそう思いながら目的地について駆け込む。思ったとおり、5人は追いかけてこない。それもそのはず、ここは男子トイレだからだ。俺は自分の部屋から出た瞬間、鈴に話しかけられたからな。

もちろん5人は入ってこれない。ん？待てよ。

俺、出てこれねえ。

１－６　一夏の用（後書き）

後書き暴露コーナ。

作者「どうも作者のｋｕｘｕです」

箒「どうも、ヒロインであるはずの篠ノ乃箒だ」

作者「あの～箒さん。なんか言葉にとげがあるのでか」

箒「そう思ってもらってもかまわない。この小説が始まってから私はあの４人と一緒に行動することは多いが一夏と一緒の行動がまったくない！！」

作者「ス、スミマセン。多分、もうちょっと経ったらそうなると思います。多分」

箒（ガチャ）

作者「なぜに真剣をとりだすのですか？大丈夫ですよ。一夏側のヒロインなのでそのシーンは必ずやります」

箒「必ずだな」

作者「は、はい（汗）」

1―7　決まり

※翔

僕は日曜日の朝。いきなり山田先生に第3アリーナ呼ばれて織斑先生と個人練習をしていた。今僕が乗っているのはラファール・リヴァイヴ。僕はどうやら打鉄よりもリヴァイヴのほうが操作できるらしいです。感覚はまったく変わっていないですが山田先生はよくなってきているといってくれます。

「基本操作はどうやら着実に使用できるようになっているな」

「ありがとうございます」

織斑先生にそういわれて僕は返事をする。

「だが、やはりまだ実戦で戦えるようには難しいだろう」

「そうですか」

まあ、予想はできてました。僕が操る機体はどうやらなぜか速さが上がるらしいです。リヴァイヴでも結果は変わりはしませんでした。

「ですが、織斑先生。彼のみタッグマッチに出させないのはダメかと」

「わかっている。だから私が個人レッスンをさせている」

「ご迷惑をおかけします」

「だが、さすがに時間が時間だ。今日はゆっくり休め」

「わかりました」

僕は織斑先生と山田先生に頭を下げてからその場から離れた。

※翔

僕は自分の部屋に戻ろうと思い歩いていた。この学校は寮だけでも十分広い。さすが、世界たった一つのＩＳ操縦者育成機関。規模が違います。

―ドン！！

そう思いながら外を眺めながら歩いていたら誰かにぶつかってしまった。僕としたことが情けないです。

「大丈夫ですか？」

「あ、は、はい」

僕はそう言って手を差し出した。ぶつかった女の子も僕の手をとる。その少女は灰色でショートヘアーですごくきれいな髪をしていた。

「ごめんなさい。僕の不注意のせいで」

「あの、私もごめんなさい」

少女は一礼をしてから僕と別方向に歩いていった。僕もそのまま歩いた。もし急いでいたら申し訳ないことをしてしまったかもしれません。

※一夏

俺はそのころ、やっと箒たちに急ぎようを聞き終わった。聞く話

だとあいつらは翔のことを女だと疑っていたらしい。しかし、俺は断言する。あいつは正真正銘の男だ。そして今、そのことで翔に謝ってもらうために箒たちと共に翔を探している。

「しかし、お前らも結構しょうもないことをするもんだな」

「うるさい。これはお前に対しても重大なことだぞ！！」

箒が口をとんがらせながら俺に講義する。だが、なぜに俺に対しての重大なことになるのかはわからない。

「てか、シャルはこんなことやらないと思っていたぜ」

「だってもし一夏にもしものことがあったりしたら」

だから、俺に何が起きるって言うんだ。むしろ男子でよかったと心から思ってる。実際、翔はシャルみたいに隠そうとはしないから俺は完璧に断言できる。

「てか、本当にあいつはどこに行ったんだ？」

「一夏。あんたアドレスとか聞いていないの？」

「メールとかはもうすでに送っているがどうやら電源を切っているらしい」

そう。俺は会話中も翔に何回かメールを送信している。しかし、うんともすんともいわない。

「だったらなんか教官に呼ばれたりしているんじゃないか？」

まだ迷彩服をきているラウラがまことなことをいう。確かに千冬姉とあっているなら電源を切っている可能性は高い。しかも、それがＩＳ関連のことならなおさらだ。

「しかしですね。わたくしはあの人は結構怪しいと思うのですよ。結構物静かな人ですし、何よりも意味不明な言動が多すぎです」

確かに、翔は昨日とか俺たちが見えない相手のことを知っていた。これは何かの能力なのか？

（なぜにあの人はわたくしたちが犯人だとわかったのでしょうが）

なぜかセシリアは難しい顔をしている。たぶん俺がいないところでなにが起こったのだろうか。

「あ、そういえば一夏は一体誰とタッグマッチ一緒にでるの？」

なぜかいきなりシャルがその話題に持ってきた。まあ、いいがな。

「俺はそうだな」

「織斑は相田と一緒のペアに決定している」

俺が答えようとしたとき、聞き覚えがある声が俺の後ろから聞こえた。

「千冬姉。それに翔」

そのこには実の姉の千冬姉がおり、横にはさっきまで探していた人物の翔がいた。その瞬間、俺はいきなり千冬姉の拳骨を食らった。

「織斑先生と言えと何回言っている」

「す、すみません。織斑先生」

俺は拳骨があたった頭を抑えながら弁解した。相変わらず俺には容赦ない。

「てか、翔。お前一体今までどこに」

「僕ですか？さっきまで織斑先生にＩＳの訓練を受けていました」

翔はあっさりと教えてくれた。しかし、ラウラの考えは合っていたようだ。これでは探しても見つからないはずだ。

「先生。さっきの話ですが」

そのとき、シャルはさっき千冬姉が言っていたことを聞き返した。そのことも確かに俺も気にしていた。

「ああ。簡単な話だ。男子同士と組めばいろいろとこちらとしてもお前たちにとっても楽だからだ」

そのことも一文あるが、しかしなぜにそのことで俺たちにはなんかの被害が出るのだろうか。ただしかし、俺の直感的にそうしてもらえなかった必ず命はなかったみたいな感じはする。

「しかし、こいつは確かＩＳをまともに」

「さっきわかったことだが相田には打鉄ではなくラファール・リヴァイヴを使えば多少は扱えることはわかった」

ラウラの質問に千冬姉はあっさり答えてくれた。そうか。たぶんそのことで呼ばれていたのだろう。

「そうか。それはよかったな」

「はい」

「そして、そのことでひとつ考えた。今回のタッグマッチは専用機持ちでのタッグは禁止にする。こっちのほうが多少専用機の勝率はさがるだろ」

千冬姉がフッと笑いながら言った。しかし、これは俺たちにとってはうれしいことだ。ぶっちゃけ、ラウラとシャルが組んだら誰も勝てそうにもない。

「まあ、これだけだな。相田は引き続き、いろいろすることがあるから私について来い」

「あ、はい」

そういって千冬姉と翔はその場から離れた。しかし、俺のタッグは翔と決まった。

※一夏

しばらく時間がたち、俺たちは食堂へ来た。そして、さらに時間が経ったあと、翔も食堂へ来た。

「おう、翔。ここあいているぜ」

俺は自分の隣の席に翔を座らせる。翔は一回礼をしてからその席に座った。律儀なやつだな。

「どうだ？やることはできたか？」

「ええ。一様できました」

この後、聞いた話だが、一回翔は自分の部屋に戻ったらしい。携帯はいろんなことが起きまくったので充電を忘れていたらしい。部

屋で充電していたとき、千冬姉が部屋に来て翔を呼んだらしく、そして俺たちに出会ったらしい。ちなみに携帯はそのまま充電していて忘れていた。てか、わかりやすく部屋においてあった。

「なんとか、タッグマッチにも参戦できるようになったからな。これからも忙しくなるぞ」

「なんか疲れが取れないような気がします」

翔は疲れたため息を吐いた。今の翔の気持ちは本気でわかる。

「まあ、大丈夫だ」

「そうですね。一夏のことは僕がサポートします」

「改めてよろしくな」

「はい」

俺たちはしっかりと握手を交わした。これは共に一緒に戦うための握手だ。

1―7　決まり（後書き）

後書き暴露コーナ

セシリア「しかし、このコーナはほとんど暴露できることはあるのですか？」

作者「ここで一回暴露しま～す」

セシリア「変なことは言わないでくださいよね」

作者「さっき登場した少女ですが、連載前に名前とか容姿や性格とかは決まっていました」

セシリア「それだけですの？」

作者「そして、髪の色はなんとこの話を書いているとき考えました」

セシリア「そ、即興ですの？」

作者「そうなりますね。彼女はまた活躍してもらうことでしょう。では今回はここまでで」

セシリア「わたくしでもなくってもこれは成立できたような気がしますの」

1―8　特訓開始

そういうことで翔と一夏の特訓が始まった。放課後、一夏はある人に鍛えてくれとお願いした人がいる。場所は第2アリーナだ。2人とも格好はＩＳスーツだ。

「一体だれですか？」
「お、きたぞ」

翔が聞いたとき、どうやらついたようだ。そこには一人の人影があった。

「一夏。言われたとおりにきた」
「サンキュー。箒」

一夏が呼んだのはセミロングの髪で癖毛が目立ち、ＩＳスーツを着た箒だ。彼女は確かにＩＳの腕は確かなものだ。

「一夏。彼女は？」
「こいつは更織箒。俺の友達であり、日本の代表候補生だ」

一夏は翔に箒を紹介した。

「どうも、更織箒です」
「相田翔です」

2人はお互い一礼した。そのとき、翔はあることを思い出した。

「そうか。一夏が言っていた僕と同じにＩＳの開発が遅れた人で

すか」

そう。簪も翔と同じく白式の開発で自分たちの専用機が開発できなくなったもの同士である。

「おまえなぁ～。痛いところつくなよ。俺もそのことは気にしてんだからな」

「私もあなたのことは聞いてます。ですが、いいところと悪いところ同時ですが」

翔のうわさはあちこち広がっている。いいところは美少年ということで、悪いところはＩＳがうまく操作できないことである。

「ちょっと、面白いことしてんじゃないの！！」

その時、一夏たちが知っている声が聞こえた。そして、その姿は誰もが知っている生徒会長の姿だ。

「一夏君。特訓なら私にも一声かけてくれればよかったのに」

その人はこのＩＳ学園の生徒会長でもある更織楯無（さらしきたてなし）だ。もはや何をするのかわかりやすくＩＳスーツを着ている。

「た、確かに心強いですが」

「はい、決まり。じゃあ、一夏君は私が見るから簪は翔君をお願いね」

しかし、簪は楯無の言葉に嫌がる顔をした。だが、言い返せない。確かに、実力では一夏は楯無が見たほうがいい。

「あの～もしよかったら楯無さんは翔を見てもらってくれま寸か？」

だが、一夏は特に簪が思っても見なかったことを言ってきた。

「なるほどね。翔君はどうなの？」

「よろしくおねがいします」

楯無のお気楽な言葉に翔は何も動じないで言った。その態度に楯無は驚いた顔をしていた。

「そんなまじめな顔をしてもらった断れないわね。いいわよ。翔君の特訓は私が見るわ。簪ちゃん。一夏君をよろしくね」

「はい。姉さん」

楯無の言葉に簪は元気欲返事した。なにがともあれ何とか簪は一夏の特訓を見るようになった。

「しかし、翔は楯無さんのことは何も聞かないのだな」

「有名な人ですから、知らないほうが失礼だと思って」

「あら、律儀な子ね。一夏君は会うまで知らなかったっていっていたし」

翔の言葉に楯無はわざとらしくいやな顔をしていった。しかし、翔の行動は当たり前のことだ。生徒会長である楯無は知らないほうの人のほうが少ない。そして、楯無が翔のことを知っているのもおかしくはない。さっきも言ったとおり生徒会長なら転校生のことはすぐに知るはずだ。

「まあ、楯無さんのことだからスキンシップが激しいのは当たり

前か」
「いや、前になんかわざと廊下の端でぶつけられて」
翔は遠い目でいう。実は翔は昨日は灰色の髪の少女以外に楯無とも会っていたのだ。
「それは、古いスキンシップですね」
「あはははは。一夏君ならわかってくれると思っていたよ」
は笑いながらいう。
「まさか、更織先輩は毎日こうなんですか？」
「ああ」
困りながら聞く翔に一夏は同情しながら返事をする。
完全に一夏は楯無のこの性格は慣れているのか慣れていないかの狭間にいる状態だ。
「それよりも、早く特訓を」
簪がそろそろだと思い、一夏に言う。
「そうだな。では楯無さん。翔のことをよろしく」
「うん。任せてよ？」
「一夏。早く」
簪に腕を引っ張られながら一夏は違う場所に向かう。
「さて、君の詳しいことは一夏君のお姉さんから聞いたから」

そう言って楯無は自分の専用機、【ミステリアス・レイディ】を呼び出す。それを見て翔もラファール・リヴァイヴを装着する。

「お願いします」

「本当にまじめな子ね」

※

「来い、白式！！」

一夏は翔と離れた場所で白式を呼び出す。同じく、向かい合った状態で簪も【打鉄弐式（うちがねにがた）】を呼び出す。

「とにかく今回は銃弾の回避や打ち向かうための練習をしたいと思っている」

「わかった。じゃあ遠距離中心で攻撃するから」

「おう。よろしく頼む」

そう言って2人は空中に飛ぶ。一夏は今回は【雪羅（せつら）】を使わないで何とか回避する。特にラウラとシャルロット相手では雪羅の燃費の悪さは完全なる足手まといになる。

「撃ちます！！」

空中に浮いてからすぐさま簪は背中に搭載された連射型荷電粒子砲の春雷を放つ。一夏は白式の機動性を生かしよけ続ける。だが、ただ避け続けるだけでは意味がない。何とか攻撃に持っていかなければならない。

「いくぞ、白式！！」

一夏は隙をうかがうために何とか距離を少し近くに行き、簪の乱射を飛びながら避け続ける。実弾ではないためにたった一つしかない接近型武器の【雪片弐型（ゆきひらにがた）】で受けることはできない。連射攻撃ならなおさらのことだ。

（何とか隙を突いて瞬間加速（イグニッションブースト）を使うタイミングを見つけ出す！！）

一夏はともかく飛び続ける。その時、いきなり後ろの連射のスピードが落ち始めた。一夏はそのことに気にしてしまって一瞬だけ集中を切らしてしまった。だが、その一瞬が命取りだった。次の瞬間、一夏の目の前からさらに連射が来た。

「この手があったな！！」

そう。打鉄弐式の連射型荷電粒子砲は２つある。違う方向に連射したのか一夏は前後に囲まれた。だが、ＩＳなら逃げ道がある。一夏はすぐに上へ逃げて回避した。

「よし！！」

そして、この瞬間、簪の隙ができた。一夏はすぐに瞬間加速（イグニッションブースト）を使い、簪に特攻した。

「そうくると思った」

簪はそう言って打鉄弐式の最強武器の山嵐を撃った。単一のロックオン・システムの６機×８門のミサイルポッドだが、突進と同じ状況の一夏にとってはいまやられるとやばい武器だった。

「くそ、やられた！！」

なみなみのミサイルポットが一夏に直撃した。そのまま一夏は地上に着地した。同時に簪も地上に降りる。

「しかし、よくあんなところであんなことを」

「一夏はあの時、隙を作ることしか考えていなかったから。逆にわかり安い隙を与えたの」

「俺の考えが甘かったんだな」

一夏は頭をかきながらいう。だが、これはこれで課題はできた。

１―９　特訓の陰に潜む影

一夏が練習をするのをひそかに見ていた金髪と銀髪の姿があった。シャルロットとラウラだ。この２人はしっかりすべての話を聞いていた。

実は２人もこの第２アリーナを使おうとして一夏と翔の姿を見て（正確にはあまり翔は見ていない）そっちに行こうととしたとき、簪と楯無の更織姉妹が現れたのでついつい隠れてしまったのだ。ちなみに２人もＩＳスーツだ。

「とりあえず、例の服でも」
「いや、着なくっていいからね」

ラウラが言う例の服とはあの迷彩服のことだ。だが、シャルロットが即座にとめた。ここではそんなのを着たほうが見つかりやすい。

「でもこのまましゃあ本気で拉致があかないね」
「いっそあの女を撃つか？」
「やめたほうがいいよ」
「だったらこのまま一夏に会うのはどうだ」
「それは……」

その時、シャルロットは黙り込んでしまった。シャルロットはこの時、あることを考えてしまったのだ。

（も、もしあの２人が付き合ってて僕らがその中に入り込んだら。わ～なんか嫌なやつになっちゃうよ！！）

ただいまシャルロットの頭の中では小さいシャルロットがそのことに対して会議をしていた。もちろん、決着はついていない。しかし、鉄の感情でシャルロットはいま普通そうな顔をしている。

「しかし、このままでは本当に拉致があかないぞ。お前の考えが当たっていたらどちらか1人を打ちのめせば」

そう言って今にも飛び掛りそうなラウラにシャルロットは必死に抑える。

「だからだめだってば。てか、僕が考えていたことわかったの？」

「今のお前と表情を見たらすぐに予想できる」

シャルロットは完全にラウラの目を誤っていた。しかもなれてこればすぐにわかってしまうことだ。

「しかも、このままだと」

「そっちのほうがおかしいと思いますが」

その時、後ろから声がかかって2人は振り向く。そこには飲み物を片手に持っている楯無と、ものすごく体が汚れている翔だった。翔は少し疲れ気味で水分を取る。そしてなぜか楯無の肌がツヤツヤしている。どうやら翔は楯無にボコボコにされたようだ。

「お、お前ら、なぜ私たちの居場所がわかった」

「さあ、確かに隠れる場所は間違っていないけど、翔君が見つけたものだからよくわからない」

楯無は微笑みながら言う。

（な、なんで分かったのかな？）
（やはりこいつは只者ではない）

シャルロットは少し驚いていてラウラは翔に向かって思いっきり睨んでいる。

「でも、本当に2人とも何しているの？まさか一夏君を見に来たとか？それとも翔君を？」

楯無は面白がりながら言う。しかし、今ここでは下手には言い訳ができない。シャルロットは前にそれで墓穴を掘ったからだ。

「多分2人も練習に来たのでしょう。僕たちはいま盛大に使ってしまったので」

翔が半分当たっている回答を言った。たしかんみ、今ここでは彼らしかこの第2アリーナは使ってはいない。

そして、この瞬間、3人はあることに分かった。それは翔が完全なる鈍感男だということだ。しかし、3人にはどうでもいいことだ。

「まあ、一夏君に用があるならいけばいいわよ」
「なに、私はお前の指図などモガモガッ」
「ありがとうございます」

何か失礼なことを言いそうだったラウラの口を抑えてシャルロットは走り出した。ラウラは口をモガモガしながら話せといっているみたいにする。

「楽しい人たちですね」

「まあ、そのことには同感ね。さて、無駄話もそろそろ終えて特訓の続きをしましょうか」
「は、はい」
翔は少し嫌なものを見た目で言った。
「大丈夫よ。もうあんなことはしないから」
「いろいろと不安です」
一体翔の身に何が起こったのだろうか。

※一夏

俺らは少し休んでからまた練習を始めようとしたとき、いきなりある2人がこっちにきた。
「あ、一夏。僕らも入れてよ」
シャルとラウラだ。だが、体勢はなぜかシャルがラウラの口を押さえている。
「お前ら、何かの遊びか？」
「ち、違うよ！！」
シャルは反論した後、ラウラの口から手を離す。
「とにかく、今から4人で特訓というのはどうだ？4人がバラバラになってな。そっちのほうが効率がいいだろう」
ラウラはすぐにしゃべりたかったのかしゃべりだした。しかし、

そのとおりだ。3人的だというのは多いと思うがなれておけば損はないだろ。

「俺はいいぜ。簪は？」

「うん」

俺の言葉に簪はうなずく。これで話は決まった。俺たちは一斉に専用機のＩＳを呼び出した。シャルの機体は【ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ】でラウラの機体は【シュヴァルツェア・レーゲン】だ。

「じゃあいくね」

「行くぞ、一夏」

「お、おう」

俺はこの時知った。この2人はすごく怒っていることを。

―ガチャ

―ガチャ

2人は完全に銃口をこっちに向けている。やっぱり。やっぱりそうだ。

「お、お二人さん。少し話しでも？」

ここは確実に話が必要となる。出なければ俺の命が！！

「一夏は僕よりも更識さんのほうがいいんだね」

「お前は私の嫁だ！！それを信念からわからせてやる」

説得失敗。さようなら、俺の人生。果たして俺に明日はあるかな？

※

―カチャカチャ

何かの音が聞こえて一夏は自室のベットから眼を覚ました。同時にいいにおいがするのですぐに眼を覚ます。一夏はＩＳスーツのままベットに寝ていたらしい。

「あ、一夏。起きましたか」

「しょ、翔か。俺は一体」

その場にいたのはさば定職を持った翔がいた。翔は一夏の質問を答える前に持っている定職を一夏の一番近い机の上に置く。

「驚きました。そろそろ戻ろうとしたとき、一夏が生死を回っている顔をしていたので。着替えは無理でしたのでそのまま部屋に運んで寝かせてもらいました」

「そうなのか。ん？運んで寝かせてもらった？」

一夏は翔の言葉に疑問を持って聞いた。

「はい。実は僕には一夏を運ぶ力が無いものなので、織斑先生が代わりに運んでもらいました」

「お、おお。そうか」

一夏はいいほうで息を吐いた。これがほかの誰かの女子だったら最悪何日か眠れない夜をすごしていたのだろう。しかし、翔は結構の非力といえるだろう。とことんＩＳに適合していない体をしてい

る。

「そうそう。先生にこれをもらいました」

そう言って翔は一枚の紙を一夏に渡す。

「そうか。ついに始まるのか」

「僕は僕自身に問題ばっかりですが」

「まあ、お互いがんばろうぜ」

一夏が持っていた紙にはクラス内タッグマッチについてっと書いてあった紙であった。

1―9　特訓の陰に潜む影（後書き）

後書き暴露コーナ

作者「今回は本気でマジでの知らせです」

鈴「あれね。タイトルが代わったことよね」

作者「はい。いくらなんでも長いと思ったので最後の部分は消しました。そのことに対してはまた感想で質問してください」

鈴「あと、更新遅くない？」

作者「それに対してもすみません。最近はテストの後に文化祭っと言うことで書く時間がほかの2作品でいっぱいいっぱいで」

鈴「しかも、文化祭は今週末に始まるんだっけ」

作者「ええ。すみませんがまた更新が遅くなるとなりますが、どうか待ってくださるとうれしいです」

鈴「あと、今回私の出番が」

作者「では、今回はここまでです」

鈴「無視するな！！」

１－１０　タッグマッチ前日

クラス内タッグマッチ。内容はクラスの中でタッグバトルのことであり、試合は一試合のみ。つまりトーナメント式ではなく、それぞれクラス内でランダムに全員分の対戦表が発表されるのだ。何せ今回のタッグマッチｈデーターを取るためのものであるのであるためにこうしたのだ。なるでくの負担を抑えたのだろう。

「それで、翔。お前のほうはどうだ？」
「大丈夫です。とりあえずは足手まといになりたくは無いですね」
「まあ、そうだな」

まだ翔の操縦テクはいまいちままだ。あの楯無でもそれなりのテクしか覚えさせるしかなかった。しかもそのテクはうまく射撃が出来るコツのみだ。出来はまあまあ。

これは確実に一夏のサポートに回るしか道が無い。

「その、ごめんなさい」
「まあ、仕方ねえな。俺ががんばるのは当たり前だ」

一夏はそう言って翔の肩をやさしく叩く。だが、翔の顔色は変わらなかった。どうやらそのことでいろいろ悩んでいるらしい。

「俺が出来ることがあったら手伝うからな。がんばれよ」
「ええ。ありがとうございます」

翔はまだ顔色は変わらずに答えた。こうして、ついにタッグマッチの日が近づいた。

※

大会前日。翔は寝付けなくって廊下をブラブラ歩いていた。目的は無い。ただ、自分がただ一つの行動によってこうなってしまったことに少し悩んでいる。

（なんで、普通以下の僕がここにこれたのでしょうか９

翔はここに来る前に、少し問題を抱えていた。そのことはまた後日話をするとしよう。

翔は近くにあった窓を開けて空を見る。夜だからなのか、風がとっても気持ちがいい。

「あ」

その時、聞き覚えがある声が聞こえたので翔は振り向いた。

「こんばんは」

「こ、こんばんわです」

あの時ぶつかった同級生の少女だ。彼女は何を隠そう同じクラスだったことが最近わかった。翔にとって誰と一緒なのかまったく今は把握できていない状況だ。だが、話をした人とはとりあえずは覚えている。

「お名前は、智原美奈（ともはらみな）さんですよね」

「はい。そうです。相田君は覚えてくれたのですね」

美奈は少しうれしそうな顔をして答えた。

「失礼にぶつかってしまういましたので、名前は覚えようと思いまして。ですが、何でそんなことをきくのですか？」

「私、目立たない人ですから」

その言葉に翔は昔の自分を重ねた。

翔は昔、あることで目立たない存在になってしまった。あの時見学に来たのもただのあまりだったわけだ。

「智原さんはなんでそうおもうのですか？」

「友だち、いないのですよ。誰一人も」

翔はその言葉で確信した。彼女は昔の自分にそっくりだ。いや、もし一夏がいなかったら同じだったかもしれない。

「智原さんは、明日どうするのですか？」

「明日ってタッグマッチですよね。確か相田君は織斑君と組むのですよね」

「はい。智原さんは誰と出るのですか？」

翔はとりあえず、話を続ける。このとき翔は思った。彼女の笑顔が見たいと。いまだに彼女は暗い顔のままだ。あの時ぶつかったときもそうだった。一切笑おうとしない顔だ。だけど、それだからむしろ笑顔をみたい。笑顔にさせてあげたい。これが翔の本性のお人よしだ。

自分のことはいい。いや、自分がやりたいからお人よしになっていく。ある意味本人にとっては悪い性格だ。

「まだ、わかりません。明日決まりますので」

タッグが決まらなかったものは当日ランダムで決まる。まあ、翔は思っていたとおりだった。

「ですが、ＩＳは動かすことが出来るのですよね」

「は、はい。相田君もそうですよね」

「はい。ですがまだまだちゃんと操れません。じっとしていたほうがまだ安全と言われました」

翔は自分の頭をかきながら言った。もちろん、さっきの言葉に偽りは無い。いまだに翔はまったくと言えるほどＩＳのコントロールがうまくいかない状況である。本当に千冬に動かないほどがまだ案全といわれたのも事実である。

「そうなの。そういえば授業でも」

「ええ。智原さんは結構操れるみたいですね」

「ええ。一様は」

その時、美奈は少し笑顔になりつつあった。翔はそのことに少しほほえましくなった。

「あ、そろそろ時間なので」

「ええ。ですが、後一ついいですか？」

翔は立ち去ろうとしている美奈を引き止めた。

「な、なんですか？」

「よかったら、僕と友達になりませんか？」

その時、美奈はものすごく不意をつかれた顔になった。対して翔はものすごく平然な顔である。普通の男子なら今の言葉はためらいを持つはずである。

「ダメ、ですか？」

「そ、そんな私なんかで」

「君のためだけではありません」

その言葉に美奈はさらに驚く。そして同時に意味がわからない顔をした。

「僕も、一夏以外の友達いないのですよ。それでもしよかったら僕のためだと思ってくれて友達になってくれたらうれしいです」

「そんな、私なんかで。ほ、ほかの人で」

そう言ってくる美奈の肩を翔がつかみ。

「智原さんだからこそ僕は頼んだのです。君以外にほかの人なんかいません」

翔は冷静な声で言った。美奈はその言葉をものすごく重く感じた。

「ほ、本当に私なんかで」

「言いましたですよ。君だからこそ友だちになりたいと」

その言葉でやっと美奈は微笑みだした。そして、思いっきり頭を下げる。

「あ、ありがとうございます」

そう言って美奈は廊下を歩き出した。

※

部屋についてから美奈は布団を体全体にかぶせた。そしてさっきの出来事を思い出す。
それはいきなりにして友だちが出来たことである。

「相田、翔君」

美奈は顔を赤くして翔の名前をつぶやく。

「こんな私の、最初の友だち」

美奈はその時、自然に微笑んだ。

１－１０　タッグマッチ前日（後書き）

後書き暴露コーナー

シャル「あれ？今回の話ってまさか」

作者「はい。これでやっと翔サイドのヒロインの完成です」

シャル「か、完成って」

作者「これでお分かりですが、この小説は一夏サイドと翔サイドのヒロインは全員違います」

シャル「そ、それって」

作者「ええ。一夏は原作主人公なのでヒロインも原作で、翔はオリジナル主人公なのでヒロインはオリジナルです」

シャル「よかった。てっきり僕たちが翔のほうのヒロインになっちゃうかと思ったよ」

作者「いや、それだけははっきり言って僕もやりたくはありませんでした」

シャル「それでは、感想お待ちしています」

作者「元気ですね」

１－１１　タッグマッチ戦前編

次の日。ついに今日はタッグマッチの日となった。

対戦相手は朝のＨＲで知らされる。当日までに決まらなかったものはクラスの中からランダムに決まっていないっ同士で決まる。

そして、翔と一夏のペアの相手は代表候補生であり専用機を持っているセシリア・オルコットとクラスメイトの朝倉晴香（あさくらはるか）だ。

「ついに始まるな。準備はいいか？」

「はい。僕も真剣にやります」

翔はやる気のある声で言った。一夏はそれを見て少し微笑んだ。もちろん一夏も真剣にやる気だ。だが、今の一夏は自分である課題を決めていた。それは白式の第二形態、【雪羅（せつら）】を使わないことで戦うことだ。

「翔。作戦は大丈夫だよな」

「ええ。やり遂げてみせます」

そんな会話をしているうちにとうとう時間が来た。翔たちは時間を見てその場から出た。

※

一夏は白式を呼び出してカタパルトに乗る。

「一夏。大丈夫だぞ」

「負けたら許さないからね」
「頑張ってね。一夏」
「負けるなよ」
「分かってるって」

箒たちに見送られて一夏はリラックスをする。そして、とうとう白式はデッキから一気に発射した。

会場はたくさんの生徒に囲まれている。だが、一夏は初めてはないために緊張はしていない。目に見えるのは今日の対戦相手のセルシアだけだ。

「あら、一夏さん。本気で戦うのはお久しぶりですわね」
「そうだな。だが、手加減はしないぜ」
「それは私のセリフですわ」

一夏とセシリアはお互いにらみ合う。一夏に好意を持っていたしても新勝負をそれで手を抜いたらそれでこそ嫌われる。それに彼女は彼女のやるべきことがある。

二人が話している間、訓練機を装備したお互いのパートナーがやってきた。これで戦う準備は出来た。

「行くぜ」
「行きますわよ」

試合開始のブザーが鳴ることにより一夏とセシリアはその場から後ろに下がり一気に空中に上がる。逆に翔と対戦相手の春香はその場にいた。

「私の相手は転校生ね」
「よろしくお願いします」

短い言葉を交わしたあと二人は後ろに下がる。翔と春香のＩＳは同じラファール・リヴァイヴ。これは銃撃戦が繰り広げられると思った矢先、翔はいきなり後ろに思いっきり下がった。

「くっ」

だが、これは翔の意思ではない。本当にまだコントロールがうまくいっていない様子である。これではやばいとしか言いようがない。

「止まってください」

翔は無理やり足を使って動きを止める。だが、その隙に既に春香は翔を撃つように銃先を翔に向ける。これに翔はすぐに反応する。引き金を引いたとき、上空に上がり回避する。しかし、回避したのはいいがまだ上空へ上がってしまう。

「まだ、コントロールがうまくいってないのか？だったら好都合」

そんな翔を見て春香も上空へ上がる。そしてハンドガンを放ちながら翔に近づく。少しとはいえだんだん翔のシールドエネルギーが削られる。そして春香はさらに翔に近づきもう片方に持っていたライフルを翔に向ける。

（これ以上はさすがに）

翔はやばいと思いすぐに盾をすぐに呼び出してライフルの射撃をとめる。そしてもう片方の手のハンドガンでカウンターの射撃を放

つ。春香は後ろに下がって避ける。だがこの時、驚いたことがある。

「なに、今の」

今の翔の動きはおかしい所がある。それはここにいた全員分かっている。

「ねえ、今の相田のやったことって」

「ああ。あれはシャルロットの」

「僕の【高速切替（ラピッド・スイッチ）】！？」

※

さっきの翔と春香の戦いは同じフィールドにいた一夏とセシリアも見ていた。

「一夏さん。何ですの今のは？」

「さあな、正直俺も驚いている」

翔は一夏に「大丈夫です」っとだけ伝えているだけでしっかりとした作戦はこの状況。つまりセシリアは一夏が担当する１ｏｎ１の状態にすることである。

「本当にあの人は何ですの」

「だが、はっきりすることは一つある」

一夏はそう言って雪平弐型を構える。

「それは俺の友だちだと言うことだ！！」

一夏はそう言ってセシリアに迫る。セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを放って対抗する。だが一夏は見事にセシリアの射撃を避ける。もう完全にこの攻撃に馴れていると見てもいい。

「どうした？ピットは出さないのか？」

セシリアの専用機、【ブルー・ティアーズ】はブルー・ティアーズといわれるピットの平気がある。だが、この攻撃は前回見破られたばっかりでそんなときにやすやすと使えるものではない。兵器だけなら今の一夏に歯が立たない。しかもいつ雪羅を使われるか分からない。だが、この戦闘では一夏は雪羅を使う気は無い。しかしセシリアはそのことを知らない。

「でしたら操作技術で対抗して見せますわ」

セシリアは違う作戦で一夏に対抗する。

「行くぜ、セシリア」

迫ってきた一夏の攻撃をセシリアは紙一重に避ける。完全に馴れている。一夏がセシリアの攻撃に馴れたのと同じくセシリアも一夏の攻撃に馴れたのである。

「くそっ」

「さあ、踊りましょう、このブルーティアーズが奏でる旋律で」

セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを一夏に向けて言い放つ。一夏もセシリアに向かう。

「相田君。あなたは一体」

このとき同時に春香は翔の行動に驚いていた。翔は驚いているどころか確信している顔をしている。

「いけますね。これは」

翔は確信したように言った。

１－１１　タッグマッチ戦前編（後書き）

後書き暴露コーナ

ラウラ「な、なんだ作者、いま相田がシャルロットの技術を」

作者「ラウラさん。これ以上は何も言わないでください。ちなみに今回の翔の行動は翔のキャラ設定を考えているうちに出来たものです」

ラウラ「うまく意味が分からないのだが」

作者「それは次回を見てください。それでは今回はこれで」

ラウラ「まて、なんか短くないか？」

作者「それはこれ以上のネタが無いからですよ」

ラウラ「な、なにい！！」

作者「実際、このコーナ自体いつまで持つか分かりません☆」

ラウラ「こら作者、真面目にしろ！！」

１―１２　タッグマッチ戦後編

翔は左手からライフルを転送する。動けばまた止まらなくなるので空中で止まって春香を狙い打つ。もちろん春香は盾を使って攻撃を防ぐ。これならばいつかは弾が切れると思ったのだ。だが、その考えは甘かった。

銃の弾が切れた瞬間、翔は【高速切替（ラピット・スイッチ）】で銃を連射型のに変えだした。これで翔への弾が切れたときの隙は無くなる。しかもセシリアは今は一夏が抑えている。なので外からの攻撃の心配は無い。

（なにこの人。ＩＳをうまく扱えないのじゃないの？）

春香は少しありえないと思っていた。だがありがちその情報はうそではない。翔がいま操作しているのは腰と指だけである。これならば操作はうまく出来る。逆に移動は前のようにうまく操作できないのだ。だが、このラピット・スイッチのおかげで止まって攻撃が可能になった。しかし、この技術はシャルロットの専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの大容量の拡張領域（パススロット）が必要となる。

「でも、あれって普通のリヴァイヴよね。何であんなのが」

「分からない。でも、そんな低容量で使用しているのなら、もしかしたら僕よりも」

「本当にあいつは只者ではないのだな」

千冬たちがいるオペレーションルームで鈴たちが相談する。確かに低容量のあの技術はなかなか出来ないものだ。だが、これにも一つの種がある。

※

「お前、なにやっているんだ？」

大会当日の朝、自分が使うＩＳの横でキーボードを打っている翔に一夏は聞く。二人とも最後の調節をしているのだが、翔がやっていることは少しおかしい。

「少しですね。いいこと考えました」

「へえ。よかったら聞かせてくれないか？」

「はい。実のところ僕は移動操作に問題があるとかと思うのですよ。ならば、止まった射撃なら何とか出来るのではないかと思いました。それで少しですねいじってます」

「なにいじっているんだ？」

「リヴァイヴの背中の装甲を外して拡張領域（パスロット）を広げているのです。動かないのなら速さの装備はいりませんので」

「そうなのか。それで何をする気だ？」

一夏は飲み物を口に入れながら聞く。翔はキーボードを打ちながら答える。

「それはですね。戦闘中でも早く武器の切替をするのです」

「ブーーーーー！！」

翔のこの言葉により、一夏はいきなりはいてしまった。

「い、一夏！？」

「だ、大丈夫だ。いいのじゃねえか？その方法」

「ええ。やり遂げて見せます」

※

なんと翔は天然でこの技術を使っていたのだ。何たる偶然。しかも彼はこの技術の名前すらも知らない状態であるため、さらに偶然だと分かる。

「やるな翔。俺もそろそろ作戦実行させてもらうぜ」

そう言って一夏は空中で後ろに下がり、セシリアから下がる。

「な、一夏さん？いきなり何を！？」

セシリアがそう言ったとき、いきなり横から射撃が入る。この射撃は翔のものだ。

「あなたですか。いいですわ。すぐに倒して差し上げます」

そう言ってセシリアは翔にスターライトｍｋＩＩＩを構える。同時に翔は大型のキャノンを向ける。

「この人、本当にラピット・スイッチを！！」

「行きます」

お互いの射撃がぶつかり合うなか、一夏は春香を狙いだした。

「しまった！！」

「次は俺が相手だ」

一夏はそう言って雪平弐型を構える。一回、雪平をわざと武器に当たることでその行きよいにより春香はバランスを崩してしまう。

その隙に一夏はすぐに零落白夜を発動した。

「とどめだ！！」

「邪魔ですの！！」

その時、セシリアは翔に向かってピットを放つ。今の翔に移動はやりにくい、。これで決まりだと誰もが思った。その瞬間。

「まだ、やれます」

翔はその場から一瞬でセシリアの前に来た。これは、一夏の技術である。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）。何ですのあなたは！！」

だが、回避できたのは一回のみ、そのあとすぐに翔はピットに打たれてそのまま地面に落ちる。

「終わりですの！！」

セシリアは実弾ミサイルで翔に向かって放った。もう翔には避ける手段はない。そのままミサイルにあたり、シールドエネルギーが0になった。

「一夏。あとはお任せします」

「まかせろ！！」

その刹那、いきなりセシリアの後ろに零落白夜を発動した一夏が現れた。

「え、いつの間に」

セシリアは今頃パートナーである春香のリタイアに気づいた。いや、そのことが今回の作戦だった。

この作戦は最初は一夏がセシリアと相手するうちに春香を翔に相手を意識させる。そのことでいきなり代わった対戦相手の切替がしにくくなる。それを利用したのだ。さらには翔が一回セシリアの攻撃を避けることで一夏に春香に止めをさせる時間を作る。もちろんその後、翔がリタイアするのも作戦のうちだ。

「まさか、油断させてからの奇襲ですか。安易な作戦ですわね」

「だが、その作戦にお前は引っかかった。そうだろ」

「そうですわね」

その会話の後、一夏は一気にセシリアのシールドエネルギーを切って削らせた。見る見るセシリアのシールドエネルギーが減り、０になった。

「終わりだ」

※

その後、控え室。改めてセシリアペアと一夏ペアは会っていた。

「なんな作戦に私が引っかかるなんて」

「単純な作戦ほど、実は人はかかり安いって、翔がいっていたぞ」

一夏のその言葉にセシリアはすぐに反応した。

「まさか、あの作戦は相田さん。あなたが？」

セシリアの言葉に翔はうなずいた。まさか、自分がやられることを前提に作戦を立てていたのだ。セシリアはなんか体の力がなくなる感じがした。

「まさかのまさかですわね。はあ、私はこれで失礼しますね」

そう言ってセシリアはその場から離れる。

「一夏。僕は次の試合見てきますね」

「あ、俺も行く」

「では、朝倉さん。僕たちも移動します」

「あ、ああ」

翔たちがいなくなり、春香は一人のその場にいた。

「相田、翔か。不思議な男だな」

そう言って春香も歩き出した。

１―１３　上がって落ちる

翔と一夏は自分たちのクラスの試合を見ていた。これも大切なことである。チームは普通の女子生徒で、相手はシャルロットと、なんと美奈のペアであった。

「あ、あの子は」
「ん？知り合いがいたか？っと言ってもクラスメイトだから全員知り合いか」
「デュノアさんの隣にいる子、僕の友だちです」

翔は何も考えずに答えた。それぐらい美奈のことを友だちと思っている。そのことに一夏は感心した。

「友だち、出来たんだな」
「はい。おかげさまで」

その時、翔は一人気に静かに笑った。

「じゃあ、この試合が終わったらちょっと話しに行くか」
「そうですね」

そう言っている間に、シャルロットが最後の一人のシールドエネルギーを切らした。これで試合はシャルロットと美奈のペアの勝ちである。まあ、結果は予想できたが。

「お、さすがだなシャルは。俺たちも行こうぜ」
「ええ」

そう言って二人は歩き出す。

※

「ふう」

待機場所に場所に着いたとき、シャルロットは汗を拭く。隣には申し訳なさそうな顔をしている少女が一人。美奈だ。彼女は結局何も出来ずにすぐに敗戦してしまった。だが、それ以上に美奈にとってはシャルロットに迷惑かけたことに申し訳ないのだ。

「ごめんなさい。私、何も役に立てなくって」

「別にいいよ。勝ったんだしね」

そんな美奈にシャルロットは笑顔で励ます。その時、どこからかドアが開く音がする。そしてそこには一夏と翔の姿があった。

「一夏に相田君。どうしたの？」

「ちょっとな」

「こんにちは、智原さん、デュノアさん」

一夏と翔は挨拶をする。シャルロットは一夏に会えてうれしそうだった。美奈も少しうれしい顔をしようとしたが、ちょっとした不安が頭を横切る。

「一夏、それに相田君も勝利おめでとう」

「そっちもだな。だけど内心トーナメント式で無くってよかったって思うぜ」

一夏は冗談交じり笑う。シャルロットも一緒に笑い出す。翔はそ

んな二人の会話を残して美奈のところに行く。

「その、相田君。おめでとう」

「智原さんもですよ」

美奈の言葉に翔は笑顔で答える。美奈は少し心が晴れた。

「でも、私はなにも役には立ちませんでしたし」

「僕もですよ。結局は一撃でやられてしまいました」

翔はギクシャクしながら言う。だが逆にそれが自然に見えて美奈にとってはとても安心できた。翔も女性とは話すのは慣れているが、同年齢なのはあまり無かったことだ。

「そうだ。相田君に聞かなきゃならないことがあったんだ」

その時、シャルロットが翔に向かって言ってきた。翔はその言葉で振り向く。

「やはり、【高速切替（ラピット・スイッチ）】のことか」

「うん。あの技術は僕が言うのもなんだけど、結構長い時間かけないと出来ないことだよ」

「そういわれましても、前日の付け焼き刃でしたし」

……。

しばらく無言が続く。

「「つ、付け焼き刃！？」」

そして、しばらくしてから一夏とシャルロットは驚きだした。だが、驚くのは当たり前だ。さっきもシャルロットが言ったとおり、結構な高度な技術であるのは確かである。だがその技術を彼は付け焼き刃程度にしてしまうのだ。これは驚きが隠せない。

「その前に、僕もさっきデュアノさんが言うまで技術名すらも分かりませんでした」

「まあね。逆に知っているほうがおかしいよね」

シャルロットは愛想笑いをしながら言う。完全に驚きを隠せないでいる。美奈もそのことで驚いて声が出ない。

「じゃあ、あの射撃は？」

「あれ？一夏は一緒に戦ったのにそのことも分からないの？」

「まあな、今回の作戦は翔が立てたものだからな。実際、聞いたときには驚いたぜ。まさか自分を犠牲にする作戦なんかよ」

「で、でも前まではうまく動きすらもできてなかったよね。今もそうだけど」

「生徒会長に指導させてもらっている際に、僕は操作技術ではなく、射撃技術を習わせてもらいました」

「そういうことか」

一夏は理解してつぶやいた。つまり、楯無と翔は操作技術の成長を捨てていたと言うことになる。まあ、あの人の実力的に考えてもよくここまで成長したものである。

「しかし、よくあの作戦を一人で作れたものだな」

「ち、千冬姉！！」

その時、いきなり千冬が現れた。それに驚いて一夏は大声で千冬

の名を叫ぶ。もちろん、そんなことを言ったらいつものお仕置きが待っている。

「いて！！」

思ったとおりに一夏の頭上から出席簿アタックが炸裂した。いい音過ぎて逆に清々しい。

「ここでは織斑先生と呼べ！！それで、話の続きだが」

「は、はい。オルコットさんの機体のことは一夏さんから教えてもらって、それでその場で作戦を」

「そ、その場であの作戦を？」

「え、ええ」

シャルロットの驚きの言葉に翔はうなずく。千冬は驚くことなく冷静である。そして少し口元で笑う。

「なかなかのやつだ」

「で、その織斑先生が何のようですか？」

一夏は聞く。敬語は怖いからつける。だが、確かにこんな話をするためにここに着たのではないはずだ。

「ああ。相田。実はお前の専用機のことだが」

「はい」

翔の専用機のこと。これは確かに重大なことである。だが、こんなところで言ってもいいのか。

「開発しないことが決まった」

千冬のこの言葉は全体の空地を凍らせた。

１－１４　友情の呼び方

「千冬姉。それって」
「その言葉のとおりだ。相田には専用機が送られない」
「り、理由はなんですか？開発だけのことではないですよね」

一夏の後にシャルロットも千冬に聞く。千冬はあせった顔色一つせずに言葉を続ける。翔は自分のことなのか、冷静に千冬の話を聞く。今ここで何を言っても意味が無いことを分かっているかだ。

「これも前にも言ったことだがやはり実力が無さ過ぎる。しかもそれは基本的レベルでな。これでは意味の無い専用機を作ってしまう」
「それってなんか間違っているだろ！！」
「いいえ。間違ってはいないと思います」

一夏の叫びの後、翔が静かに言った。その言葉は回りの空気を冷たくする。

「確かに僕の実力は基本が出来ていません。なので専用機を持たされないことにも納得します。ですが、これだけは知っておいてください」

翔の言葉をみんなは静かに聴く。美奈はものすごく心配な顔をして両手を合わせている。翔は言葉を続ける。

「ここに来たのは、僕の意思ではないことです」

その言葉の意味は、翔は実際は自分からここに望んできたもので

はない。強制でここにつれてこられた。理由は簡単、ＩＳを扱える男子。それだけで翔は生活を変えられてしまったのだ。

「僕は、自分の部屋に戻ります」

そう言って翔はこの部屋から出て行った。とりあえずは、翔は自分の専用機をもてないことを了承下みたいだ。

「相田君」

続けて美奈もこの部屋から翔を追う形で出て行った。後は取り残されたものは何をすれば分からない。

「今の言葉は効いたな」

「千冬姉」

「お前も、そう思っているのか？一夏？」

「俺は、今はそうとは思わない。昔なら分からないといっていたかも」

「そうな、ならいい。あと、がんばったな織斑」

そう言って千冬は部屋から出て行った。シャルロットは翔を追いかけるか迷っていてそわそわしている。

「任せようぜ。ここはあいつが決めた友人に」

「一夏」

※

美奈は廊下で空を見ていた翔を見つけた。そして彼のそばに行って肩に触れる。翔も美奈のことに気づく。

「智原さん。どうしたのですか？」
「部屋を、急に出て行きましたから」
「すみません。ご心配おかけしました」

美奈は翔の隣に立って窓の外を見る。空は雲ひとつ無い快晴だ。だが、こうしているだけでは会話は始まらない。とりあえずは何か話しかけようと美奈は決心した。

「なんか、僕のせいであそこの空気が悪くなって、いっそ出てきてしまいました」
「え」

美奈が喋ろうとしたとき、翔がなぜ出て行ったかの理由を言ってきた。だが、美紀の決心は無駄にはなっていない。

「相田君は、今ここの環境に不満？」
「不満と言いますが、僕には綺麗過ぎるところです」

翔の言葉はまるで自分はここに来てはいけない人間のように言ってくる。いや、多分そういう考えで言ったのだろう。

「でも、私は相田君がいなかったら友達が出来ませんでした」
「……。そうですね。僕もうれしかったです」
「あの、相田君。一つ提案があります」
「提案？」

翔は美奈のほうに振り向く。見てみると美奈の顔は赤くなっている。

「じ、実は私聞いたのですが。と、友達同士は下の名前で呼び合うらしいのです。そ、それで」
「では、僕らもそうします？」

翔のその言葉がとどめになり、美奈の顔が一気に噴火したように「ボン！！」という音を鳴らしてさらに赤くなった。翔がなぜにそうなった理由は分からない。どうやら彼も一夏と同じ唐変木のようだ。

「え、あ、あの」
「ほら」

混乱している美奈に翔はそっと手を差し出す。美奈はその手に気づいたら少し落ち着いたみたいだ。そして、二人は握手を交わす。

「これからよろしくです。美奈」
「は、はい。翔くん」

二人の絆が少し深まった。

※一夏

今俺はシャルと一緒にほかの試合を見に来ている。さっきまでは翔のことが心配であまり見ることに集中できなかったが、さっき翔のメールで安心して今は試合を見ることに集中できている。

ちなみそのメールの内容は。

『ご心配おかけしました。僕は別に嫌な方向ではなんとも思っていません。半分は美奈のおかげですが』

っと言う分だった。どうやら二人の友情の仲は深まったようで安心した。翔にも心を通い合わせる人間が出来て本当によかった。

しかし、本当にしゃべり方もそうだがメールまで敬語にされるとこちらも敬語で返さなければと思っちまうよな。前そのことを言ったら癖なので心配ないと敬語で言われた。あれってなれなのか？

「お、箒も勝ったようだな」

「う、うん。そうみたいだね」

今試合をしていたのは俺のファースト幼馴染の箒だ。パートナーは箒と同じ部屋の鷹月（たかつき）さんだ。勝ったらしく二人ともうれしそうな顔をしている。

「一夏さん。ここにいましたか」

「セシリアか。さっき振りだな」

その時、俺の後ろからセシリアが声をかけてきた。しかし、俺を探していたってなんのようだ？しかもなんか少し大きめの箱を持っている。

「一夏さん。相田さん知りませんか？」

「さっきメールは来たがどこにいるのかは」

「そうですか。それなら仕方ありませんね」

そう言ってセシリアは地面に箱を置き、俺の隣に来る。おいおい。急いでいるんじゃないのか？

「しかし、セシリアは何で翔を探しているんだ？」

「この箱は相田さん宛てのものとなっています」

1―15　ダンボールの正体

その日の夜。翔と美奈は先に食堂で晩御飯を食べていた。会話はまったく無い。むしろ回りの人たちのほうが騒がしい。

「あれ？相田君。織斑君と違う人と食べてる」
「あの子誰？あ、仲良くなったのかな？」
「篠ノ之さんたちともそんなに仲良くは無いみたいだけど」

しかし、回りの生徒の会話は完全にこっちのことである。美奈のほうは少し顔を赤くしているが、翔は気にしないように食事をしている。

「お、いたいた」

その中から一夏が翔を見つけて翔の下に来る。

「一夏。例の荷物と言うのは何ですか？」
「お、どうやら心当たりあるのか？」
「ありません。僕はここに来る前はそんなものを送ってくれる人などいませんでした」

さりげなく翔は自分の残酷な過去を明かした。だが言った本人の翔は何も気にしていない顔をしている。

「じゃあ、その荷物とは言うのは何でしょうか」
「ともかく、早く確認してほしいです！！」
「なんでオルコットさんが怒っているのですか？」

いきなり怒りながら登場したセシリアに翔はマジで驚いている。美奈も声が出ないようだ。

「セシリアが俺に持ってきてくれたんだ。今はヘヤに置いているがな」

「そうですか。ご迷惑をおかけしました」

翔はセシリアに頭を下げた。セシリアはまあいいでしょとと言って一夏の隣に座った。

※

翔と一夏は自分たちの部屋に来た。そして一夏は送られてきた荷物をにらみだす。さすがの一夏でもすぐに切り出す勇気はない。

「さて、あけましょう」

「え!?」

だが、翔はそんなことを考えず、速攻でダンボールについているテープを取り出しだした。どうやら翔はそういう緊張感にも鈍いようだ。

「これって」

「どうした?」

一夏に言われて翔はダンボールの中にあったものを一つ見せる。それは女の子のミニスカートだった。それを見て一夏は驚く。

「お、お前。こんな趣味が」

「殴りますよ。あ、これは服ですね」

サラッと暴力的言葉を発したのは気にしないでさらに翔はダンボールの中をあさる。一夏は嫌な予感しかならなかった。

一夏ならいつものパターンで間違えて自分が殴られることになるパターンだ。

「しかしですね。下着まであるとはこれは一体」

翔は女性者の下着を持ちながら一夏に聞く。一夏はいきなり現れた女性用の下着に驚きを隠せない。

「お、お前は無事なのか？」

一夏はとりあえず、そんなものを平気で持っている翔に聞いた。とりあえず、聞かないよりもましだった。

「ええ。だってただの布ですよ」

翔は笑顔でいう。確かに、確かにそうなのだが、一夏もそのことを分かっている。だが、それは健全な男子としてそういう恥じらいは持っておいたほうがいい。

（てか、そのことで前、箒に怒られたんだよな）

あのことのことは一夏は思い出したくは無いのだ。

「しかし、そろそろかな」

「何ですか？」

「地獄のショータイムだ」

※一夏

俺がそう言った瞬間、いきなりヘヤのドアが開きだした。こんな残酷な開け方をするのはもうあいつら以外いない。

てか、今は翔もいるんだぞ。俺一人だけのときも困るが。

「一夏。相田に新しい荷物だ」

そう言って部屋に入ってきたラウラが大きなダンボールを持ちなら言った。そうか、俺じゃなくって翔関連のことか。

……へ？今なんて言った？

「一夏。入ってもいいよね」

「お、おう」

違うダンボールを持ちながらシャルも入ってくる。しかし、なんでかラウラのダンボールのほうが大きい。

まさか人が入っているわけじゃないよな。しかも女の子が。そうしたらなんか分からないが俺の命がなくなりそうだ。

「では、開けますね」

「お前はなにか驚いたりしないのかよ」

「す、すごいね。僕も少しはためらうよ」

「うむ。思い切りがいいのはいいことだ」

シャルが俺に同情する中、ラウラはいいことだと言う。それなの

に翔はなに言っているのか分からない顔をしている。

って、もう開けたよ。本当にある意味翔は大物かもな。

「一夏。これ見てください」

「な、何かいたのか」

「人がいました」

「へ！？」

「しかも同い年ぐらいの女の子です」

俺の嫌な予感がここで当たるとは、あれ？俺の命もあと数分！？

「あ、起きましたよ」

※

一人の少女は起きだした。髪は水色のストレートヘアーでまるで妖精みたいだった。そして今着ている白のワンピースでさらにその幼さを感じさせる。

少女は一枚の紙をみてあたりをキョロキョロ見渡す。そして一度一夏をみる。その瞬間、シャルロットとラウラの殺意が一夏に向けられた。

「一夏。どういうこと」

「とっとと白状しろ」

「まて、俺はなにも言っていないし、彼女も何も言っていない」

だが、少女は一夏をじろじろ見る。その間にもシャルロットとラウラの怒りゲージは上がっていく。

「この人じゃない」

そう言って少女はプイッと違うところをみる。一夏は完全に安心したような顔になる。だが、これで分かった。彼女は男性を探していることを。

「あ」

そして思ったとおり少女は翔を見て少し声を出す。

「翔君。少しお話したいのですが」

それと同時に美奈が開けっ放しのドアから翔の姿を確認してから失礼ながらも言ってくる。

「見つけた。翔!!」

そしていきなり少女はいきなり翔に抱きついてきて翔の唇にキスをした。

「!!」

「きゃー!!!!!」

美奈の今まで無い声によってこの場はいつものメンバーが集まりだした。

1―16　お泊り問題

いきなり名の知らない少女にキスをされた翔はすこしだけ驚いていた。それ以上にそれを見た美奈が一番驚いていた。

この様子を見ていた一夏はあることを思い出した。それは昔、無理やりラウラにキスをされたことである。あの時は本当に死にそうになった。一夏は忘れかけていた過去を思い出してしまった。

「だ、誰ですかあなたは！？」
「ど、どうした？」
「何かあったのですか？」
「また一夏がなんかしたの」

美奈の声の後、箒、セシリア、鈴が一気に入ってきた。鈴にいたってはもう一夏が何かをやらかしたことを確信しているようだった。

「って、なんだそいつは！！」

翔の唇を離した少女を箒が指を指して聞く。だが、誰も答えることが出来ない。もう説明できるのは彼女自身のみだ。翔はさっきの発言で知っているはずが無いと知ったのでもうそれしかなかった。

「き、君は一体」
「……私の名は。……飯田かなで（いいだかなで）」

少女、かなでは静かな声で言った。外見どおりなんかおとなしそうな子だった。翔はその名に聞き覚えがありそうな顔をした。

「……名前を言えば。……お母さんが分かってくれるって。……言ってくれた」

かなでのこの言葉の後、翔は思い出した顔をした。どうやら彼女がなにものか分かったようだ。

「思い出しました。飯田さんってこの前、僕がバイトをしていた先のお母さんのことですね」

翔の言葉の後、かなではものすごくうれしそうな顔をした。その顔はとても幼く、かわいかった。

「翔、バイトって」

「かなで。確か娘さんっと言うのは聞きましたが会うのは初めてですね」

これでさっきの彼女の行動が理解できた。かなでが持っていた写真は翔の顔の写真だったのだ。かなではこれをもたされて翔を探してごらんと言われたのだろう。

「でも、なんでダンボールなんですか？飯田さん」

「……かなで」

「へ」

「……かなでと呼んでくれなきゃ。……言わない」

そして頑固な子だった。翔は頭をかいて「しょうがないですね」っとつぶやいた。かなではものすごく目を輝かせている。

「では、かなで。なんでダンボールなんかに入っていたのですか？」

「……そっちのほうが。……旅費が安い」

その言葉でみな呆れた顔をした。なんという単純な理由。翔は改めて別に質問に切替る。みんなその鈍感さにも呆れていた。

「じゃあ、なぜいこの場所に来たのですか？」

「……この学園に。……入学したから」

みんなその言葉に少し驚いた。まさかこんな風に入学者が来るとは思えないからだ。しかし、翔のみ何かを考えていた。それはかなでの言葉に何か引っかかるからだ。

「入学を、したのですか？するのではなく」

「そこは私から説明しよう」

そう言って千冬がこの部屋に入ってきた、まったく気配をまったく無く入ってこれるのはさすがのものだ。

（千冬姉。いつの間に忍者の修行を）

その瞬間、一夏の頭に千冬の拳骨が落とされた。千冬のその顔はまた変なこと考えているなっと言っている顔だった。

「飯田はある特権でこの学園に入学した。そいつは今日からＩＳ学園の生徒だ」

『え～！！』

翔以外みんな声を上げる。

「相田は驚かないのか」

「まあ、そこまでくればそういうことだと分かっていました。ですが、彼女の部屋はどうするのですか？」
「それはもう決まっている」
「それでは飯田さん。着いてきてください」

次は麻耶が部屋に入ってきた。たった一つのダンボールでなんていう来客の多さだ。麻耶は手をかなでに差し出す。だが、かなではその手をとらず、翔の体にしがみついた。麻耶はその行動に少しショックを受けた。

「……いや。……翔と一緒がいい」

これまたあっさり大変なことを言ってくれた。周りのみんなその発言に何かの危機感を覚えた。

「それだと、3人でこの部屋に泊まると言うことになるぞ。それにベットも無い」

だが千冬は冷静に大人の態度で言い返す。確かに、ここが翔一人だと問題は確かにあるが少しは減る。だが、ここには一夏もここにいる。

「……大丈夫。……これがある」

そう言ってかなでが自分が入っていたダンボールから出したのは寝袋だった。どうややかなではダンボールの中で寝袋を着たり脱いだりしていたみたいだ。なんて器用だ。

「だ、ダメよ。一夏だっているんだから！！」
「そうですわ。なにかあったら大変です」

「……この人には。……興味ない」

バッサリとかなでは鈴とセシリアの疑問にものすごく的確に返した。だが、これはある意味一夏にダメージがいく。

「で、ですが翔君が」

「……私。……翔にいろいろ教わりたい」

なにか嫌な空気が美奈とかなでの間に流れる。

「で、どうします織斑先生」

「き、君もなにも動じない人だね」

「？」

シャルロットの言葉にものすごく分かりやすく分からない顔をした翔。その翔の言葉に千冬は少し迷った。

「……後。……これを僚艦に渡してっと。……お母さんに言われた」

そう言って一枚の手紙をかなでは千冬にわたした。それを見た千冬は仕方が無い顔をした。この時一夏は結果がどうなったか分かった。

「仕方だない。飯田はここに止まれ」

『ええ！！』

女性陣の叫びが響く。一体手紙になんて書いていたのか。

「これは、痛いところをいわれたな」

「えっとですね。『この子を渡す代わりにこの子の一番最初のお願いを聞いてあげてください。出なければ何をするか分かりませんよ』っと書いています」

「相田。いつの間に」

いきなり翔は千冬が読んだ手紙を音読し始めた。しかし、これは単なる脅迫状である。これに千冬が折れるということは彼女は何かをすごいものを握っているかもしれない。

「ちなみにこれはかなでが先生の手からとって僕に呼んでほしいと言って起案したので読みました。文を一回読んで変ではなかったので」

翔の言葉にかなではうなずく。どうやら、この部屋は3人で泊まることになった。

１－１６　お泊り問題（後書き）

お久しぶりの後書き暴露コーナ！！

セシリア「このコーナ。久しぶりですわね」

作者「そうですね。っということで今回は少し苦い役を引き受けてくれたセシリアさんをゲストにしました」

セシリア「しかしですね。何ですのこの急展開」

作者「実際、僕自身こうなると思いませんでした。書いているとなんかキャラが勝手に動いてしまう感じで。この後どうしましょう」

セシリア「アホですわね」

作者「すみません」

1―17　隙間の朝

次の日の朝。俺、織斑一夏はベットから起きた。そして、翔が寝ているはずの隣のベットの前の布団。正確には一人の少女がそこに寝ているのをみた。ちなみに翔の姿はどこにも無い。

布団で寝ている少女の名は飯田かなで。昨日、ダンボールでここに転入してきた少女である。彼女は昨日まで寝袋で寝ようとしていたが、さすがにキャンプでもないので布団を用意させてもらった。実を言うと俺も翔もベットを変わると言ったのだが、飯田は布団のほうが寝やすいと言ってこの状態になった。

だが、俺にとって、この状態は非常に困ったものだ。特に、翔がいないのがもっともやばい。これで誰か女子たちが入ってきたらなんて勘違いされるか分かったものではない。いや、勘違いの内容はなんだか分かるような気がするが。

「一夏、おはよう！！」
「一夏さん、起きてますか？」
「寝ているならさっさと起きなさい、一夏！！」
「私が起こしに来たぞ、喜べ！！」
「僕が起こしてあげようか？一夏」

一瞬。一瞬できやがった。しかも後半分は俺が寝ている前提かよ！！しかも、今の俺の体の向きは今あいつらに見られたらやばい方向にある。

「い、一夏。貴様はなんでそっちの方向を見ている」
「ま、まさか一夏さん」

「あんた、嘘でしょ」
「嘘だよね。嘘って言ってよ一夏」
「ほほう。これがロリコンっというやつか」

……。

完全に空気が凍りやがった。てか、ラウラよ、なぜその言葉をオブラートに包まないであっさり言ってやがる。って、そういうことじゃなくって。今俺はやばい方向に思ったとおりの方向でことが進んでいる。何とかせねばこのままだと俺は社会的に抹殺されてしまう。てか、その前にこいつらに殺される！！肉体的に！！

「いや、これはそのだな。やはり今まで無い風景を見てしまうのと同じことでな」
「言い訳無用」

そう言って箒は真剣を取り出す。なぜにそんなものを朝からもっている！？

「ま、待て箒。話せば分かる。そいてシャルもなぜに銃をこっちに向ける」
「撃ったらスッキリするかなって思って」
「するかー！！」
「なにやっているのですか？」

そう言って入ってきたのはこの場を何とかしてくれそうな男、翔だった。翔はなにか紙袋をもって部屋に入ってきた。しかしナイスタイミングだ。そのまま援護射撃を頼む。

「……。ごゆっくり」

「待て待て！！」

なぜにそのままちょっと考えた後にドアを閉める。てか、何でごゆっくりだよ。俺のライフはとっくに０に近い！！

「いや、朝からの特訓かと」

「この状況でなぜにそういうことを考えられる」

「ですが、それ以外の理由が見つからないので」

……。

また空気が凍った中で俺は思った。これって、俺が被害妄想のしすぎなのか？

「ほら、かなで。朝ですよ」

そんな俺たちを通り過ぎて翔は飯田を起こしにいく。しかし、さっきまでどこに行っていたんだ？

「……翔？」

「はい。もう朝ですので着替えて食堂へ行きましょう。ほら、一夏も」

「お、おう」

しかもなんか世話をしている。こいつ、実は面倒見がいいのか。って、なぜに飯田はいきなり寝巻きを脱ぎだすの？しかも俺は上着から脱ぎだしてしかもぶ、ブラもしていない。あれ？翔はポットでお茶を入れているし、同時に俺の背中からものすごい殺気を感じる。

「一夏」

「一夏さん」
「あんたやっぱり」
「一夏。僕は残念だよ」
「まさか、お前がロリコンとは」
「お前ら、そろそろ目を覚ませ」
「ああ、お前を斬って醒めるわ！！」

そう言って箒は俺に向かって真剣を振りかぶってきた。俺は助けを求めて回りを見渡す。だが、前には殺気を放っている女子軍。後ろにはなぜかこの場で着替えている飯田。そして何も気づいて用に見える翔。あ、あいつイヤホンをつけている。そりゃ気づかないわ。って、気づけよ！！

俺が心の中でツッコミ試合をしている間に箒の真剣がこっちに襲い掛かってきた。俺は後ろに向かって無理やりジャンプして避ける。危ないところだった。

「ふん！！」
「うおっ！！」

だが、攻撃は終わらない。このままでは本当に俺の命が。

「はい、終わりです。みなさん、お茶をどうぞ」

そう言って俺と箒の間に翔が入ってくる。てか、みんなの分のお茶を入れていたのか。とりあえずナイスナタイミング。

「ほら、篠ノ之さんもどうぞ」
「す、すまない」

さすがの箒もいきなり差し出されたお茶を断ることが出来ないか。しかし、こいつらの仲は仲良くもないし嫌っているようにも見えないな。

「ほら、ほかの皆さんも、一夏も」

「お、おう」

翔に言われて全員お茶を取る。しかし、なんでこんなナイスナタイミング差し出してきたんだ。

「しかし、織斑先生が何でこれが日常茶飯事だと言うのか良く分かりませんね」

「まさか、このお茶を入れろといったのは千冬姉が？」

「いいえ、お茶を入れるのは僕の考えですが、君の近くにいる僕が、この日常茶飯事を一時的でもいいので止めておいてくれ」

ああ。これですべてが理解した。どうやら翔はさっき千冬姉に会ってこのことを止めてくれと頼まれたのか。しかし、結構遅めのタイミングだし、しかも避けなきゃ俺は斬られていたぞ。

「っと、かなでの世話のついでに頼まれました。さっき」

と、いうことは飯田の世話が一番の優勢順位だということだから俺は後にされたということか。千冬姉、頼む相手はいいが出来るだけもうちょっと好条件にしてくれよ。

「まあ、一夏がいきなり無かったものを見てしまうのは人間として仕方ないものですよ。話は良く分かりませんが、許してもいいのではありませんか」

前言撤回。順位が低くってもこいつは頼りになります。ありがとう、千冬姉。箒たちも首を縦に振ってくれて万事解決した。

「……翔」

「あ、かなで。制服着てくれたのですね」

そう言って翔のそばに来たのは制服姿の飯田だった。どうやら制服のサイズは彼女に合わせているらしい。うん。なんかかわいいぞ。

「……似合ってる？……翔？」

「ええ。似合ってますよ。かわいらしいです」

翔がこの言葉を聴いた飯田は顔を真っ赤にしてしまった。な、なにが起こったのだいま？

「さて、そろそろ朝ごはんを食べに行きたいのですが。一夏はとりあえず着替えてくださいね」

「あ」

そういえば、俺はまだ着替えていなかった。

１－１８　かなでの銃騎士

今日からかなでも一緒に授業を受けることになった。クラスは翔（世話役）がいるということで１組になった。だが、またいきなりの転校生、しかも女だとほかの生徒はどういう評定するのだろうと正直、翔は悩んでいた。

「きゃーー！！かわいい！！」

「お人形みたい！！」

だが、朝のＨＲでその心配は速攻で消え去った。かなではすぐに女子生徒たちに次々に抱きつけられた。

「お前たち、まだＨＲ中だぞ」

だが、千冬の一声でみんなすぐに席に戻った。そして、かなでは翔（世話）の隣の席に座った。

「さて、飯田。お前には実習の授業でやってほしいことがある。後で私のところに来るように」

「……翔」

「後でちゃんと行くのですよ。織斑先生は先生なのでちゃんと言うことを聞いてくださいね」

「……わかった」

千冬の言葉をきいたかなではすぐに翔の袖を引っ張って助けを求める。その仕草を受けた翔は冷静にかなでに言うことを聞くことを教えた。かなではそのことをちゃんと（？）分かってくれたみたいなのでうなずいてくれた。

※

実習の時間。女子であるかなでの世話は何とか美奈に任せることが出来た。これも翔がお願いしたことである。

「それでは、今からお前たちにはあるものを見てもらう」

教師の千冬が声を上げてみんなの注目を浴びる。実習の前になにかやるのだろうか。だが、そのことを気になっても誰もざわつこうとはしない。もちろん理由は千冬だからだ。

「それでは飯田かなで。前に出てさっき言われたことをしてほしい」

「……はい」

千冬に呼ばれてかなでは前に出た。だが、前に出たかなでの目線は完全に翔に向けていた。それに気づいた翔は笑顔で応援する。まあ、彼も何をするかまったく分かってはいないが。

「じゃあ、始めてくれ」

「……はい。……来て。……【銃騎士(ストライチャー)】」

かなでがそう言った瞬間、首にかけていた緑色のネックレスが光りだした。そしてその光はかなでを包み込み、あるものの形になっていった。

「これって、まさか」

「IS……だと？」

鈴、箒がそれを見て驚くように言った。そう。その形だけで分かるようにそれはＩＳだった。そして、光はだんだんおさまり、ついにかなでは姿を表した。その姿は緑色のＩＳを身に装備していた。

「こんなＩＳ。見たことが無いよ」
「これって、専用機ですか？」
「でも、彼女はどこにも属していないはずじゃあ」

ラウラ、セシリア、シャルロットの順で声があがる。そう、そのＩＳは量産期ではなく、完全にオリジナルの姿。そして、誰も見たことが無いものだ。そしてさらなる真実が明らかになった。

「おかしい」
「どうしたシャル？」

その場でシャルロットが少し首をかしげてつぶやいた。それを見て一夏が近づいてたずねてみる。

「うん。それがね、ＩＳの【コア・ネットワーク】の情報に、このＩＳの情報が一切無いんだよ」
「ま、マジかよそれ」

【コア・ネットワーク】。それはＩＳのコアに内蔵されている、データ通信ネットワークのこと。広大な宇宙間での相互位置確認・情報共有のために開発されたシステム。現在は操縦者同士の会話として、オープン・チャネルとプライベート・チャネルが利用されている。最近の研究で、「非限定情報共有（シェアリング）」を行い、コア自身が自己進化していることが判明している。だが、そのコア・ネットワークでもこのＩＳの情報が一切無いのだ。

「それじゃあ、あれはコアが無いＩＳなのか？」
「そんなのありえませんわ。私が証明して差し上げますわ」
「私もやるわよ」

そう言ってセシリアと鈴が前に出てきた。完全に二人ともかなでと戦う気である。だが、担任の千冬はその二人を止めようとはしない。

「いいだろう。飯田。この二人と相手してくれるか？」
「……余裕」

―ピキッ！！

二人の額から何か切れた音がした。いや、絶対にした、その証拠に二人の背中はものすごく燃えていた。

「いいじゃないの。そのセリフ、のしつけて返してあげるわ」
「私たちを怒らせたことを後悔させて上げますわ」

そう言ってセシリアはブルー・ティアーズを呼び出し、鈴は甲龍（シェンロン）を呼び出す、これは完全な2体になってしまう。

「かなで。いいのですか？」
「……うん。……余裕」
「では行きますわよ！！」

翔の言葉にかなでがうなずいた後、セシリアが先制攻撃にスターライトｍｋＩＩＩのレーザーを放ってきた。その射撃をかなでは空中に飛んで回避する。

「逃がさないわよ！！」

だが空中には鈴の甲龍（シェンロン）が待ち構えていた。鈴の手には２つの大型の青龍刀、【双天牙月（そうてんがげつ）】を構えている。そのまま鈴はかなでに向かってくる。

「……どうかしら」

かなではそうつぶやいたあと、背中のバックがあき、ロングキャノンが肩のところまで落ちていき、更に伸びた。そして、射撃の標準を向かってくる鈴に向かって。

「……雨の豪放（レインバズーカ）」

強力な光線が鈴に向かって放たれた。鈴は一気に急ブレーキをかけて、腕を盾にして防ごうとする。

「きゃあ！！」

「なにやっているのですか！！」

だが、威力がでかすぎて鈴はそのまま後ろに下がっていった。だが、かなでの後ろにはすでにセシリアが攻撃態勢に入っていた。

「……雨の銃（ライフル）」

後ろのキャノンをしまってかなではとてもとにハンドライフルを呼び出した。だが、その銃は普通のライフルと違い、発射口が銃先に小さく６個ぐらいあるのだ。さらにはその銃先は回るような形をしている。

「さあ、踊りなさい！！」
「……遅い」
かなでがセシリアより早く銃の引き金を引いた。その瞬間、まるでガトリングのようにライフルから弾が連射してきた。
「連射式のライフルですの！？」
セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを放つのをやめてかなでの射撃を避ける。だが、その連射はやむ気配が待ったくなく、セシリアを追う。
「ま、まさかエネルギー要らずですの？」
「あたしに任せて！！」
だが、かなでは止まったまま銃を連射していた隙を、鈴は見逃さなかった。そのまま後ろを狙ってくる。
「……一粒の雨（シングルレイン）」
かなでがそう言ったとき、バックからさっきのキャノンとは違うところ、つまり横からいきなり機械の翼が出てきた。そしてそこから射撃とは違う小さい玉が次々に飛んでいく。
「なによ、これ」
「……撃（や）って」
その瞬間、その小さい玉から次々に鈴に向かって射撃してくる。鈴は抵抗しようとするがただでさえ小さく攻撃も当てずらいのに、数が多く、さらにはその一つ一つが尊重しているのか攻撃をみんなで

避けていく。数が多いと言うことはいろんなところから射撃がくいる。さらには受け続ければ大きなダメージになってしまう。ちりも積もれば山となるである。

「そ、そんなあたしが」

「またまた隙がありますよ」

セシリアは分かっていた。あれは自分のＩＳにもついている小型のピットであることを。それならば、操作しているほうは身動きが出来ないはず。

「……あまい」

だが、その考えは間違っていた。見事に真正面に飛んできたセシリアは見事に雨の銃（ライフル）の連射に当たってしまう。セシリアと鈴は何とか回避しようと共に空中で動いてしまう。だが、両者前を見ていなかったらしくぶつかってしまいそのまま落ちて言った。

「……楽勝」

１－１９　自然から生まれたコア

セシリアと鈴は見事にかなでにやられて地面に落ちてきた。前にもこの光景は見たことがある。そう分かればこの後の二人の行動は目に見える。

「鈴さん。何であんな攻撃にひるんでいるのですか！？」
「あんたこそ、ただの連射式のライフルにやれてるんじゃないわよ！！」

思ったとおり、完全に二人は言い合っている。まったく成長していない。

「でも、なんだこのＩＳは」
「こんなＩＳ、しかも何も情報が無いなんて始めてみるよ」

一夏とシャルロットはかなでに近づいていった。コア・ネットワークにつながっていないＩＳなど確かにおかしいし、あるはずが無いのだ。

「教官。教官はこのＩＳのことを何か知っているのですか？」
「織斑先生だ、ボーデヴィッヒ。だがな、このＩＳのことは私もまったく分からない。だから調べさせてもらうために持ち主の飯田をここに連れて来させたわけだ」

千冬が知らないということは後は頼りになるのはあの人だけになる。それはＩＳの開発者であり、篠ノ乃束（しののたばね）、彼女のみである。だが、束はただいま盛大に逃走中。国が全力で探しているがいまだに見つからない。みんながそのＩＳのことに悩んでい

たとき翔はかなでのもとに向かう。
「かなで。何かこのＩＳ、銃騎士（ストライチャー）ことで知っていることがあれば教えてくれませんか？」
「……いいよ」
『ええ！！』

その言葉により、みんな一斉に驚いた。

「ちふ、織斑先生。飯田に話を聞こうとはしなかったのか？」
「聞いた。だが教えようとはしなかった。だからこの学園につれてきたんだ。ふむ。だが相田と飯田はあわせたのはどうやら正解だったらしいな」
「かのじょ、相田君の言うことしか聞いてないですしね」

千冬の言葉にシャルロットは顔を引きずりながら言った。どうやら翔は完全にかなでを整除できる人間となった。

「……私の機体は。……自然機といって。……自然で。……生まれたコアが。……ＩＳに変化した。……ものなの」
「つまり、人の手ではなく、自然から生まれたＩＳ．いえ、コアということですか」

翔がかなでの言葉を繰り返した。かなではその言葉にうなずいた。しかし、それだと更なる疑問が出てくる。それは、なんで自然でＩＳが作り上げられたのかだ。

「では質問を変えます。そのコアはどこから手に入れたのですか？」
「……雨の日。……森の中で。……見つけた」

偶然なんだろう。彼女が言った言葉が正しいとすると、分かっていて実行したとは考えられない。いや、普通ならそのシチュエーションもありえない。

「それからこのＩＳの形となったのはいつですか？」
「……つい最近」
「そうですか。織斑先生。これで十分ですか？」
「ああ。つまり、飯田は偶然そのコアを見つけて、偶然にそのＩＳを扱っているというのだな」
「自然から生まれた機体ですか」

千冬と麻耶は翔とかなでの近くに来てさっき聞いた言葉をまとめて復唱する。

「自然機、ですか」
「……うん」

翔の言葉にかなではうなずく。とりあえずは、謎はいろいろ増えた。今はそれだけしかいえない。いや、それしか分かっていない。

「織斑先生。どうします？」
「そうだな。とりあえずは今日の放課後、その機体を見させてくれ。相田も一緒に来てくれ」
「はい。分かりました」

※一夏

今日の実習はいろんなものが見えた。言葉数の少ない女の子の戦いと、その子のまったく謎のＩＳ，そして更にその少女にコテンパ

ンにやられたセシリアと鈴。しかし、翔は結局、飯田の話を聞ける立った一人の相手になっているな。しかし、あの鈴たちを倒したあの子の実力って一体。

「一夏。あんたいま失礼なこと考えたでしょ」
「そ、そんなこと無いぞ」
「だったら早く抜いてください」
「あ、ああ」

おっと、今は確か俺の部屋でいつものメンバーでばば抜きをしていたところだった。しかし、俺ので出番か。よいしょっと。そういえば本当に俺の考えは読みやすいのかな。もしかしてポーカーフェイスへたくそなのかな俺って。

「げっ」
「一夏。いま完全にばば引いたよね」

シャルに言われて俺は更にへこむ。確かに俺はばばを引いてしまった。くそ、俺ってやっぱり。いや、まだだ。このトランプで俺はポーカーフェイスが出来るとわかるはずだ。

「じゃあ、引くね」
「ああ」

5分後。ばば抜きはとうとう俺と鈴の一対一になった。畜生、まさかここまで残るとは。しかも状況は俺が2枚。つまり鈴は1枚で俺がばばを持っているというわけだ。あのあと、結局だれも俺の手元からばばを引いてくれなかった。

「じゃあ、これね」

「ああ！！」
「やった。私の勝ち」
「ちくしょう」

結果。俺の負け。

「しかし遅いね飯田さんたち」
「まあ、ＩＳだからな。時間はそりゃかかるものさ」

シャルの言葉にラウラが答える。だが確かに遅い。時間はもう１０時半を越えている。俺たちは結果が知りたいがために今こうしてトランプをしている。

「ねえ、次は大富豪をしようよ。僕やってみたかったんだよね」
「おう、やってみるか」

こうして俺たちは１１時まで時間をつぶす。だが結局、翔たちは帰ってこなかった。ちなみに大富豪はラウラと鈴の負けが続いた。

１－２０　読めぬ文字

ＩＳ学園内のある一室にて、千冬はあることに驚いていた。そして、その目線は完全に翔を見ていた。翔は今コンピューターのキーボードをものすごい速さで打っている。そして今その行動こそが千冬を驚かせていた。だが、内心は驚いていても顔には出さないところはさすが千冬と言ったところだろう。

「織斑先生。これは一体」

「さあな。だが、束と競えるほどでもないとしても学生でこれは」

麻耶と千冬はそのコンピュータが映し出されているリスプレイをみた。そこには難しいプログラムがたくさん打ち並べられていた。これはすべて翔が打ったものである。

「翔君。これ」

「ありがとうございます」

翔は美奈に差し出されたコーヒーを手に取った。少しの休憩だ。そして千冬は翔のそばに来て疑問に思っていたことを口に出す。

「お前のその技術はどこで学んだ？」

千冬はそう言ってまたディスプレイを見直した。

「自然機と名づけたこの機体はまったくの未知のＩＳだ。なのになぜお前は次々に解読していく」

そう。翔はかなでのＩＳのプログラムを文字化しているのだ。し

かもＩＳをセンサーに当てても何も情報が無かったのにかかわらずそれを見ただけで文字化したのだ。

「さあ。僕にも分かりません。一様バイトでコンピューターの扱いは慣れていますが」

「そうか。だがこの情報は貴重だ」

「いえ、何も結局は分かっていません」

千冬の言葉に翔はすぐに返した。そしてその言葉ははっきりとしていた偽りは無かった。ましてや冷やかしでもない。

「これはかなでが授業で使った武器のみのデータです。本体のほうの解析はあれだけでは無理でした。ですが、一つだけ確信はしました」

「な、何ですか？」

翔の言葉に麻耶が問う。千冬は黙って翔の話を聞く。そんな翔を美奈は見守っていた。ちなみに時間はもう１１時を回ってすでにかなでは近くのソファーでうとうとしている。

「このＩＳは一夏のＩＳ、【白式】と同じように後付武装（イコライザ）が無いのですよ。それと同じく拡張領域（パスロット）もまったくありません。ですので、あらかじめ武装している装備しか使えないみたいです」

「だが、その武装している武器はすべて見慣れないもの。特にあの小型のピットはオルコットとは違い、可動中も本人の行動が可能になっている」

「ええ。後は換装装備（パッケージ）が無いと見れば第四世代と見えますが、同時に単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が無いのでそうとも言い切れない状態です」

「どの道、まだ良く分からないのですね」

翔の言葉を聴いて麻耶は肩を落とす。千冬は手をあごに当てて何か考えていた。とりあえずは翔が知っていることはすべて話したことになった。

「まあいい。今日は時間も遅い。明日の授業に支障があっては困る。3人はもう休んでいいぞ」

千冬が声をかけた後、翔と美奈は同時に頭を下げた。かなではもうすでに寝てしまっているが。翔たちはそのまま部屋を出た。

「美奈、すみません。付き合ってもらって」

部屋に出た後、翔はかなでを背負いながら美奈にお礼を言う。その言葉に美奈は首を横に振った。

「いいのですよ。ですが、今の話し、私が聞いてしまっていいのですか？」

「美奈は、あの文字が見えましたか？」

「え？」

翔は分かっていた。文字化しているとき、千冬たちはあの文字を読み取れてはいなかった。なぜならその言葉のスペルはめちゃくちゃで、普通の人には見えない。だが、翔はその文字の意味をはっきり見えていた。

「ぼんやりですが、最初の一行の、『雨のコア、銃騎士（ストライチャー）』と言うのは読めました。後は少ししか理解できませんでした」

その言葉で翔は確信した。この時の考えは読めるのは子供読みという考えも存在したが、千冬と麻耶もそんなに年齢が激しく離れて

いるわけではない。もちろん成人と考えれば納得がいくのだが、成人といってそんなに体に違いがあるわけではない。だが、その考えも消えたわけではない。そしてもう一つの考えを試すために、翔は急いで自分の部屋にもどる。

「お、翔。遅かったな」

翔が部屋に入ったとき、そこにはトランプのカードを囲んでいた一夏たちがいた。翔は起きていてほっとした。そして、かなでを自分のベットに寝かせて改めて一夏たちのほうに顔を向ける。

「一夏。それに篠ノ之さん、凰さん、オルコットさん、デュノアさん、ボーデヴィッヒもこれを見てください」

翔が出したのはさっきのディスプレイに画面の一行だの写真だ。実は部屋から出たときに撮影していたのだ。今は何も言われていないので犯罪行為にならないのだが、早くしないとそうなってしまう。もちろん後で消す気でいる。ちなみに正解の答えは雨だ。

「さあ、分からん」
「これって本当に英語ですか？」
「これを見せて何をしたかったの？」

その言葉を聴いたとたん、翔の考えは確信した。これは、今読めるのは翔、美奈。そして持ち主のかなでのみとなる。

「いいえ。すこしですね」

そう言って翔は美奈を連れて部屋を出る。

「どうやら、この文字は僕たちしか見えていないみたいです。理由は分かりませんが」

「そ、それって」

そう。これでは謎は一切解決してはいない。むしろ増えたと考えてもいいのだろう。謎が出てきたとき、夜は続く。

１―２１　読める人

次の日の朝。今日は日曜日だ。そのため珍しく翔は少し遅めに起きた。だが、起きた瞬間、朝一番の問題が発生した。なんとかなでが翔の布団の中にもぐってきているのだ。

昨日の夜。翔は真っ先にかなでを自分のベットに寝かせた。その後、起こすわけにも行かなく、そのままそっとしといたほうがいいと思い、翔はベットとベットの間にある布団で寝た。ただそれだけである。

（なるほど、こういうことですか）

かなでは普段は布団で寝ていると言っていた。それはつまりベットで寝なれていないのか、それとも布団に野生本能みたいなことが発生して布団の中に入ってきたのか。だが、どちらにしても翔には非常にめんどくさい状態である。翔もそのことを理解した。ちなみに、隣では一夏が気持ちよさそうに寝ている。

（まあ、そのまま寝ているのは不幸中の幸いですか）

とりあえず、かなでが寝たままで助かった。もし翔より先に起きていたらなにされるか分からない。とりあえず、翔はかなでを持ち上げてベットに戻そうとする。まずは夜と同じ状況にしなければならない。

「翔くん。起きてます？」

その時、扉をノックする音と共に美奈の声が聞こえた。

「ええ。ちょっと待って下さい。今着替えますので」

翔は一つあせらずに美奈に声をかける。美奈なら勝手に入ってこないのではっきりした理由を言えば分かってくれて待ってくれるだろう。だが、ここで状況は思いもしない方向に走る。

「一夏〜。起きてる？起きているわよね。入るわよ」

そう言って理不尽に鈴が速攻で扉を開けだした。その行動に翔は驚いた。まさかのワイルドカードである。

「あんた、なにしてんの？」

そして勝手に入ってきた鈴は目を細くしてかなでをお姫様抱っこしている翔を見た。翔は早くかなでをベットに戻した。

「かなでがベットから落ちたので戻したのです」

だが翔はあせらずに正直な答えをさらさらと言う。鈴はなんか納得していない顔で納得してくれた。とりあえずは細くしている目はやめてほしいところだ。

「ちなみに、一夏はそこで寝ています」

「あ、コラッ一夏。起きなさい」

翔は一夏を指差して伝える。それを見た鈴は速攻で寝ている一夏の胸倉をつかんで体を揺らす。その揺らぎに一夏はやっと起きだした。

「お、おお。鈴か」
「あんたね～今何時だと思っているのよ」
「ちなみに今は８時前です」
「って、あんたは名に着替えているのよ！！」

一夏は起きてすぐに鈴がいることに気づく。そして翔は一夏に時間を伝えるのと同時に着替えを始めた。今日は休みなのだが、校舎に用事があるので制服に着替える。まあ、女子の前というのは翔の考えの中にはない。

「では一夏。僕はひとまず校舎に行ってきます。かなでが起きたら教えてください」
「おう。分かった」

翔の言葉に一夏は手を上げて答える。そして翔はさっさと部屋を出る。扉の前には美奈がおとなしく待っていた。美奈も校舎に行くので制服姿だ。

「おはようございます。美奈」
「おはようございます。かなでちゃんの様子はどうですか？」
「まだゆっくり寝てますよ。さて、僕たちは校舎に向かいましょう」

翔と美奈は早速校舎に向かう。まずはあの人に合って話をしなければならない。

※

校舎に入った翔たちは早速職員室に入り、千冬に話しかける。

「お前たちか。私になにかようか？」
「昨日のことで分かったことがあります。それを話しに来ました」
「……。では、場所を変えるぞ」

千冬は立ち上がって職員室を出た。そして昨日来たあの部屋にまた来た。どうやらここが一番話しやすい場所みたいだ。

「で、話って何だ？」
「その前に一つ質問があります。織斑先生は昨日の僕が書き換えた文字を読めましたか。答えによって僕の報告は変わります」

翔の言葉に千冬は少し固まった。いきなり質問をしてきたのは確かだが、結構奇妙な質問だったことに驚いているのだ。

「見えなかったぞ。そう言っているということはやはりお前には見えたってことだよな」
「はい。同時に持ち主のかなではもちろん、美奈の読めました。ですが、一夏たちには読めなかったみたいです」

千冬の答えの後、すぐに翔は結果をいいだした。千冬は翔とかなでは見えているのは分かっていたが美奈が読めることにはさすがに驚きを隠せなかった。そして、一夏が読めなかった。これはどういう意味を表すのか。

「僕はこれをある条件に定めた人だと思います。たとえば」
「あ、ほかの自然機があれば扱える人とか？」
「ええ」

美奈の言葉に翔はうなずく。だが、果たしてほかの自然機などあるのか。もちろん、それが問題でもある。

「奇妙なことだな。しかし、人を見つけたとしても自然機は見つからないかも知れないぞ」
「ですが、その逆もあるわけです。可能性は０ではないのですから」
「そうか。なら分かった。お前たちにはとりあえずその文字を読める人を集めろ、その写真のみは扱えるように許可する」
「「はい」」
翔と美奈は千冬の言葉に返事をした。

１―２２　睡眠模様

こうして何とかあの字を読める人を探すことになった。もしかしたら自然機とあの字が読める人は何かしらの法則か共通点があるかもしれないからだ。そういうことでなるべく人を集めていたほうがいいのだ。

しかし、この時翔たちはあるいことを思い出してしまった。それは、話しかけられる相手がいないことだ。

翔は転校生で今でも普通に話しかけられる相手はまったくいない。女子の中で話せるのは美奈とかなでしかいない。美奈は友だちが出来ないことに悩んでいた。そのことで話せる相手もいなかったと考えてもいいだろう。

「どうします。翔くん」

「……。とりあえずはかなでのところに戻りましょうか」

だがこの考えは問題を先に延ばしただけである。

※一夏

翔が外に出て３０分ぐらい経った。そして俺は今窮屈な時間を過ごしていた。理由は明白。俺の近くのベットの上ではすやすやと気持ちよさそうに寝ているもはや幼女と言えるぐらいの小さい少女がいる。しかもなぜか姿は寝巻きではなくＹシャツだけを着ている状態である。しかし、あいつこんな姿の少女を良く運べたな。俺はなんか恥ずかしくって運ぶことも出来そうにも無い。

だが、問題はそれ以外にもある。それは俺のベットに座ってさらには俺を時々にらんでくる鈴と、ラウラだ。

あの後、なぜかラウラもこっちの部屋に入ってきた。しかも入ってきたとき、鈴
きているのに気づいていなかったらしく、いきなり服を脱ごうとしやがった。もちろん全力で阻止をした。朝からいろんな意味で目に悪い。しかも疲れた。もちろんあの二人はにらみ合いを今でも続けている。誰か助けてくれ！！。

―コンコン。

俺が心から願ったとき、部屋の扉からノックされた音がした。どうやら願いは届いたらしい。

「い、今開けるぞ」
「あ、一夏。良かった。ねえ、今から買い物にいか……」

扉を開けた先にいたのはシャルだった。だがなぜかシャルは何か言っている最中に回りを見渡していたらしく、言葉が途中で途切れる。そしてなんか後ろに黒いオーラが出てきた。

「一夏。あれはなにかな？」
「ん？」

なぜか怖いトーンでしゃべってくるシャルに言われるまま俺は後ろを振り向いた。そしてそこには完全に上布団を蹴って足の肌を見事にさらけ出して寝ている飯田がいた。

「……ぁ」

この時、自分の顔が見れなくって残念だったと思ったことは今までに無いかもしれない。それぐらい俺は面白い顔と絶望に満ちた顔を同時にしていることが分かる。

「一夏。あれは何かな？」

シャルは黒いオーラを出しながらにっこりと微笑みながらハンドガンを右手に持つ。

まて、それは完全に話を聞く人の行動ではない！！てか、近くに鈴とラウラもいるはずだが。って、どこにもいない！！あいつら完全に逃げたな。

「一夏。あれはなにかな？」

「い、いや。俺は何もしてねえぞ。神に誓うぞ。だから気を取り直してくれ、シャルさん」

俺は正座をしながら両手を合わせて謝った。しかし、俺は本気で何もしてないぞ。

「まあ、ラウラたちも近くにいるみたいだし」

そう言ってシャルは黒いオーラを消してハンドガンを消す。同時にまるでアニメか漫画のように俺のベットがギクッという音を出しながら動いた気がした。

「お前ら、そこにいたか」

やはり、あの二人はベットの下に隠れていたか。しかし、あの一

瞬でよく隠れたな。ある意味すごい。

「しかし、一夏がこの子を見てるの？相田君は」

「いや、そういうことではないが、俺も出かけようとしているのだがあの二人がな」

そう、俺も早速の休みなのでどこかへ行きたいと思っているのだが。あの二人の言い合いがなぜか始まって俺は出かけなれない状態である。

「じゃあ、一夏。とりあえず僕と一緒に行こうか」

「そうはさせないわよ！！」

「一夏と出かけるのはこの私だ！！」

カオスである。ただ二人が三人に増えただけな気がしてきた。

「……ん。……んん」

その時、ベットからある声が聞こえた。どうやら飯田が起きたみたいだ。だが、ダメだ。今飯田のことを見たら殺される気がする。

「あれ？翔はどこ？」

「あ、ちょうどかなでが起きてくれましたか。すみません一夏」

「あ、ああ」

ナイスタイミング！！やはり男子同士だとなんか分かち合うところがあるんだな。俺はまた命を救ってもらった。そんな気がする。

「……あ。……翔！！」

そう言って飯田は翔に抱きつく。そんな飯田を翔は頭を撫でる。しかし、本当に今の姿は目のやりどころが困る。だが翔は本気で気にしていないみたいだ。

「あんたね。親代理なんだからしっかりしなさいよ」
「いや、親代理ではないと思いますが」
「……違う。……夫」
「それも違います」
「ほ、本当です」

飯田はまるで本気のように翔に言ってくる。智原はその言葉にすぐにツッコム。なんかこのパターン見たことあるような気が。

「おお。ならば私と同じだな。一夏は私の嫁だからな」
「だから違うってば」

合ったな。しかも超近くで超間違えている。

「かなで。早く着替えてご飯を食べましょうか。僕たちもそういえば食べていないので。その後お話があります」
「……うん」
「じゃあ、僕たちは先に出ていようか。一夏」
「ああ。そうだな」

そういわれて俺はシャルと共に部屋から出る。同時に後ろから鈴とラウラも着いてくる。これは後の二人を呼んでみんなと一緒に町をぶらつくほうが楽しそうだな。

１―２３　もう一人の解読者

一夏たちが外に出かけた後、翔たちはかなでの朝ごはんに付き合っていた。実際、翔たちもいまだに朝ごはんを食べていなかったのでちょうどいいと言ってもいいだろう。

「……それで。……何とかなるの？」

「まあ、専用機持ちのほとんどが読めなかったと考えれば専用機持ち以外の人に当たるほうがいいとしか分かっていない状況ですね」

「実際、専用機持ちも数人しかいないのでそれでも範囲が広いですね」

確かにこの学園の専用機持ちはほとんどが一夏のグループなので後は３、４人程度しかいないだろう。だが、そんなことを考えている暇など無い。

「とりあえずは僕たちが話せる相手を当たりましょう」

だが、翔が話せる相手など一人しかいないわけだ。

「あ、相田君だ」

「本当だ！！」

「あの小さい子も一緒よ」

その時、本音とその友だちが翔を発見してこちらにきた。もちろんかなでにも興味はあるみたいだ。

「どうかしたの、こんなところで頭を引きちぎって」

「あ、布仏さんたち。この文字見えますか？」

「わ〜。綺麗なスルーだ」

自信満々に言ってきた本音の一言を翔は違う話題でスルーした。とりあえず時間が無いので変なボケにツッコンでいられないわけなので翔は単刀直入に聞く。女子たちはその写真をジーと見つめる。

「ううん。読めないよ」
「なんて書いてるの？」
「そうですか。ありがとうございます」
「またスルー！？」

翔は美奈とかなでの食事が終わったことを確認した後、即座に食堂を出て行った。ちなみに本音の質問には答えられないと言う意味でスルーした。まあ、急いでいるのは事実だ。

「それで、どの人に会うのですか？」
「いやその前になんかいろいろと解決しそうな感じがしますが……」
「それって、どういうことですか？」
「あ、相田君」

その時、一人の少女が翔に近づいてきた。

「あ、朝倉さん」
「どうしたの？こんなところで」

こっちに来た少女とは晴香のことだった。そして、彼女に会えたことは翔も少しうれしかった。なにを隠そう、翔と話せる相手とは春香のことだったのだ。

「ちょうど良かったです。朝倉さんに聞きたいことがあるのです」
「ん？なにこの写真」
「朝倉さん。この字、読めますか？」
「……」

まるで晴香は何かを考えているかのようにその写真を見つめていた。だがそれも一瞬ですぐに翔に声をかけてきた。

「うん。読めるわよ。でも、これってなんて意味？」
「それは後で教えます。ですのでちょっときてください」

そう言って翔は晴香の手を握ってそのまま歩き出した。それを見ていた美奈とかなではなんか不愉快な顔をしていた。もちろん、当の本人の翔はまったく気づいていない。

※

「そうか。意外と早かったな」
「まあ、途中思いがけないことがありましたが、逆に良かったです」

翔たちが再び来た場所は千冬が1年1組の教室である。今は教室の中には生徒は誰一人もいない。

翔が言っている事はさっき女子たちがこっちに来てくれたことである。そのことによっていろんな人に一気に聞けたので逆に好都合であったのだ。

「で、朝倉がこの文字を読めたというのか」
「は、はい」

「このことによって新たな共通点が生まれると思ったのですが、1年1組としか共通点がないですね」

翔は改めて当初の読める人を集めることの問題を考えた。だが、それ以外の共通点はなかなか見つからない。その時、栞が行儀良く、手を上げてきた。先生がいるから無意識にそうなってしまうのだろうか。

「あの、翔くんとまともに話せる女子ではないのではしょうか？」

「つまり、僕が普通に話せる専用機持ち以外の女子と言うのが共通点ですか」

「……でもそれだと。……新たな疑問が。……出来る」

美奈の言葉は意外としっくりして、翔はいままでの状況を声に出した。だがそれだとかなでの言うとおりで新たな疑問が生まれる。それは。

「なぜ翔くんが絡んでいるということですか」

「なんかそう聞くと相田が特別な存在に聞こえるわね」

課題が増えた。全員そう思った。だが、考えることしか今はやることが無い。もしその予想が当たっているとしたら今この字を読める人は全滅と考えてもいいだろう。

「しかしだな。あのＩＳがもし自然で生まれたとしたら、もしかしたら伝統がある地でなにかがあるかもしれないな」

「そうですか。あ、ならかなでがこのＩＳのコアを見つけた場所に行くというのはどうですか？」

千冬の一言により、翔は思いついたように言った。確かにそれだ

となにかが分かることがあるかもしれない。

「そうですね」

「……ん。……案内する」

「私も行く。このままだと気になって仕方が無い」

「では行って来い。明日戻れなくってもちゃんとした報告があれば了承する。これはＩＳ学園として知っておく必要があるからな」

「ありがとうございます」

みんな千冬に一礼をした。とりあえずはまず一旦準備をしてから学園を出ることになった。

１―２４　Ｒｅｄ　ｌｉｇｈｔ　ａｔ　ａ　ｄａｒｋ　ｐｌａｃｅ

翔たちは昼から私服に着替えてかなでの案内で翔とかなでが地元までやってきた。その後、電車で移動。かなでがＩＳのコアの場所まで向かっていく。

「ここですか」

翔たちが来たのはそんなに高くも無い山だった。この山は昔から家族で上ることで有名でさらにな名を残すほどの名山である。

「ですが、何でここに」

「……学校行事で」

「なるほど」

かなでが前に通っていた学校でここを上る行事があったのだろう。実際、かなでが通っていた学校はお嬢様の学校で、多分、体力の問題でこの山にしたのだろう。

「ですが、ここならあまり時間はかかりません。早く行きましょう」

「はい」

「……うん」

「ああ」

そう言い合って翔たちはかなでを戦闘にして山を登りだす。山の中は道が出来ていて更には階段みたいになっている。

だがその途中、かなでがいきなり道を外れだした。翔たちは無言

で着いて行くが、だんだん道が険しくなっていく。

「か、かなで？何でこんな場所を通っているのですか？」

「……あの時。……迷ってここに。……来ちゃった」

「なるほど」

いかにも簡単な理由だった。だが道は本気でどんどん険しくなっていく。もはや山ではなくジャングルみたいな感じだった。

「な、なんだ！！」

「くもの巣ですよ」

いきなりくもの巣に引っかかった晴香を翔は救出する。

「きゃあ！！」

「美奈！？」

次は美奈がいきなり地面を踏み外してしまって少し段差になっている部分を滑らせてしりもちをついてしまっている。回りも足場が見えないほどに草木で太陽が見えなくなってしまい暗くなっている。

「かなで。君はどうやってここまで迷ってきたのですか？」

確かにここまでの道を謎ここまで迷ってきたのだろうか。だが、かなでの足取りに迷いは無い。翔たちはただしたがって着いていくしかない。

「美奈。ほら」

「あ、ありがとう」

翔は美奈に手を差し出した。美奈も翔のその手を取って立ち上がった。二人はそのまま手をつなぎながら歩き出した。

「しかし、逆にこっちのほうがコアが見つかりそうな感じがするな」

「まあ、確かにそうですね。だけどこの後、謎の洞窟がありそうな感じですが」

「……着いた。……ここの洞窟」

「……」

本当にあった。本当にこのパターンだった。しかも中はまた暗くってなんかお化けがいてもおかしくない。

「かなで。君は本当にどうやって迷ったのですか？」

「かなでちゃん。ここに入ったの？」

「……入った」

みんな完全に絶句した。果たして本当に帰れるのかと。

洞窟の中は寒くってものすごく暗かった。あらかじめ翔が持ってきたライトで回りを照らすしかない。美奈はこういうところが苦手なのか思いっきり翔の腕にしがみついている。その光景をかなでは不愉快に見ていた。

「……翔。あそこの壁」

「これは」

すでに着いたのか、翔たちの目の前には大きな人の削られて絵がかれている壁が出来上がっている。その絵は弓矢を放とうとしてい

る絵だ。

「あ、中心に何かが抜けた跡があるぞ」

そう。そして壁の中心にはなにか丸の形の跡がある。

「多分、ここにコアがあったのでしょうか」

「だが、なんでこんなところにＩＳのコアが」

「おかしいですよね。ＩＳはそんなに昔に開発されたものではありません。なのになんでこんな古代からあるもののようにあったのでしょうか」

「謎が増えるばかりですね」

そう悩んでいる翔たちだったが、その場にすでにかなでの姿が無かった。翔たちはすぐにそのことに気づいた。

「飯田。どこに行った」

「あそこの壁を見てください」

翔が照らし合わせた壁には大きな穴がある。多分、ここを通ったのだろう。

「かなで。どうかしたのです――――か？」

翔は穴を抜けてかなでを発見して声をかけた。だが、翔はすぐにかなでよりも周りの壁に目を向けた。そこにはたくさんの日本語ではない文字がたくさん出てきている。そして、この文字は前にも。いや、昨日も見たことがある。

「人とつながり、脅威になるこの力。自然の力を蓄えて人にささ

げる」

翔はある壁の文字の一文を音読する。

「これは、あの写真の文字」

「私たちも、読めます」

美奈も晴香も周りの字を読もうとする。だがあ、文字が多く、さすがに全部は読み取れない。

「――――――痛っ！！」

その時、いきなり翔は左眼を抑えてしゃがみだした。まるで痛みを我慢しているように。美奈は心配してすぐに翔に声をかける。

「翔くん。どうかしたのですか？」

「眼が……いきなり」

翔は左眼を抑えながら立ち上がった。そしてその目を抑えた手からどんどん血が出てくる。

「翔くん。血が」

「大丈夫です。痛みはありません」

そう言って翔は歩き出した。すでに美奈は翔から離れており、その場から動かなかった。

翔は歩きながらあるものをポケットから取り出した。それは一つの鍵だった。

「……翔。……その鍵は？」

「昔、僕がある場所で見つけたものです。そしてそこもこんな文字がたくさん埋め込まれていた場所でした」

かなでの言葉を軽く聴いて翔は歩き続ける。そしてこの場所の一番奥の場所までたどり着く。同時に左眼を抑えていた手をどけて血が出ている眼を露出した。

「ここに。力が」

そうつぶやいて翔はその壁の小さいくぼみに鍵を差し込んで、ひねった。

―カッ！！

その瞬間、その壁がいきなり赤く光りだした。そしてその光は翔の両手首に集まっていく。

「りゅ、う、き」

その言葉のあと、光はまるではじけたように消えていく。そして翔の手元に残ったのは真っ赤リストバンドのみだった。

「翔くん。これは？」

「僕も、さっぱりです。ですが、まるで左眼がここに鍵を刺せと」

「あ、左眼の血がなくなっている」

晴香の言葉を聴いた翔はすぐに触って確認する。確かに。もう血が止まっていた。

「とにかく。早く戻りましょうか」

「はい」
「ああ」
「かなで」
「……あ。……道」
「かなで？」
「……分からない」
「ええ！！」

１―２５　竜騎

翔たちは一回洞窟から出て分からなくなった道を探そうとする。だが、無茶に歩き回るのは完全に遭難フラグである。女子たちはおろおろしている中、翔は自分の両手首についた赤いリストバンドをみる。

「皆さん。きてください」

その後、冷静にみんなにこっちに来るように伝えた。その後、耳打ちでかなでに何かを伝えた。その後、またみんなの方向に顔を向ける。

「で、どうする気だ相田」

「簡単な話です。地面がダメなら空中で移動するのです」

「あ、ＩＳを使えば」

「だが、今専用機を持っているのは飯田だけだろ」

「大丈夫です」

そう言って翔は一歩後ろに下がった。そして、両目を閉じて軽く息を吐いた。

「行きましょう。【竜騎（りゅうき）】」

翔がその言葉を言った後、赤い光が翔の体を包んだ。まるでＩＳを纏うように。

「こ、これって」

「まさか、ＩＳ？」

そして、光が消えた頃には翔の姿は変わっていた。赤と白のボディと翼。そして青色のアイシールド。これが翔のＩＳだ。中の格好はパーカーだ。

「これが、翔くんの」
「ま、まさかあの光か？」
「分かりません。正直言いますと、分からないことばかりです」
「……でも、これなら」
「ああ。移動は早いな」
「このまま山を下りましょう」

そう言って翔は美奈を抱えだした。同時にかなでも自分の専用機、銃騎士（ストライチャー）を呼び出して晴香を抱える。そして同時に飛んで山を下る。

「あれ？」
「ん？どうかしましたか？」

美奈は抱えられながらあることに気づいた。そのことに翔は聞く。

「ううん。翔くん、ＩＳちゃんと操作できてるから」
「あ、そういえばそうですね」

確かに美奈の言うとおりだ。確かに翔のＩＳの操作はものすごくへたくそだったはずだが、なぜかこのＩＳ，【竜騎】はうまく操作できている。

「まさか、このＩＳのために、僕はＩＳが動かせたのですかね？」
「そこまでは、分からないです」
「あ、そろそろ着きます」

そう言って翔は地面にたどり着いて美奈をおろす。だが、その場にはまだ誰もいない。空を見れば今だかなでたちがこっちに向かってくる。しかし、何であっちはあんなに遅くなっているのだろうか。まさか、何か問題でもあったのだろうか。

「どうかしたのですか？」

やっと到着したかなでたちに翔は聞く。

「……翔。……早すぎる？」
「へ？」
「相田。飛ばしすぎだ」
「すみません。僕はただ普通に跳んでいたはずですが」
「……じゃあつまり」
「そのＩＳの平均スピードが今のだと考えていいのかこれは」
「私たちは多分、乗っていたので気づかなかったのでしょう」

確かにかなでが猛スピードで無いとしても、平均スピードで、さらには扱いが慣れていない状態でのこのスピードは異状だ。

「まあ、それは後で考えましょう。とりあえずは学園に戻って報告しましょう。何とか明日の授業には間に合いそうです」

※一夏

時刻は８時になるが、翔たちはまったく帰ってくる様子はない。そう思いながら俺は廊下の窓で夜の空を眺めていた。

千冬姉が言うにはもしかしたら明日の授業中に帰ってくるかもし

れないとまで言っていたが。だが、これはつまり千冬姉まで翔たちの出かけに関連していると考えてもいい。

「あ、一夏」

「箒」

俺が考え事をしているとき、箒がこっちに来た。

「なにやっている？」

「何も。箒こそ、ここまで何のようだ」

「見れば分かるだろ」

そう言って箒は手に持っている真剣を少し分かりやすく見せる。

ああ。多分居合いでもしていたのだろ。

「相田たちはまだ帰っていないのか？」

「ああ。千冬姉は心配ないと言っていたがな」

「しかし、千冬さんがなぜそんなことを知っているのだ？」

「簡単に考えればあいつらの出かけが千冬姉と関係してるのだろ」

「まあ、妥当な考えだな」

だが、ここまでの時間を考えていたのなら、なんかそのことも怪しく考えてしまう。もしかして、俺たちが知らないところでなにか起こっている感じがする。

「俺たちは出かけていたから学園内の問題は無かったみたいだがな」

「学園内の問題があれば私たちを呼ぶからな」

学園内の専用機持ちが出かけている途中、学園に問題が発生した

ときに連絡が無いほうがおかしい。まあ、俺は別に役に立ちそうにも無いがな。

「まあ、明日になれば分かるといいな」

「まったく、そのとおりだぜ」

※

この時ＩＳ学園の近くに何か黒いＩＳが飛んでいた。もちろん、学園はそのことに気づいていない。なぜなら殺気が無いのだ。まるで何かを待っている感じだ。

そして、ＩＳ学園に向かっている女子三人と男子一人がいた。四人は急いで学園の校舎に向かって走っていた。

そのＩＳはそれを確認したのか、すぐに去って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1028x/

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～赤竜と白の騎士

2011年12月31日01時50分発行